
何か変な奴らが変な事しよったで（笑）

鉄の翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何か変な奴らが変な事しよったで（笑）

【Nコード】

N2739U

【作者名】

鉄の翼

【あらすじ】

実在するユーザー達が織り成す学園トリップコメディー（笑）

正直なところ阿保ばっか（笑）

今日もまた馬鹿騒ぎやるZEE

参加者

亜差霸蚊さん

夢路雪乃さん

マンゴープリンさん

あんぎゃーすさん

Kさん

緋水さん

清浦刹那さん

蒼の空音さん

でお贈りします (<|>)

ある日の学園（笑）（前書き）

まず初っ端、夢路雪乃いつけええ！

さてさて

仲の良い（？）ユーザーが集まってリレー小説などをやってみたさらに集まったユーザーが全員少し変わっていることから題名がつけられた。

さあさあ、どんなことが起こるかは本人達にもわからない！！

キャラ（もといユーザー）紹介

名前：マンゴープリン

容姿：身長は170cmぐらい。眼鏡装備。男兼マンゴープリン

服装：制服はだいたい着崩していて、制服を着用している事は稀

特徴：実は眼鏡が本体。

性格：誰とでもフレンドリー（馴れ馴れしい）

相手がどんな性癖持っていても気にしない。

いつでもどこでも全力投球、無茶振りでもやるから気を付けろ！

唐突に変な行動をする。かなりの無茶振りを要求をするときがあるので気を付けろ！

誰かを嫌いになるって事はあまりないが、物凄く好きってなる事も少ない。

笑いのツボは異次元。大概笑ってる。

取扱注意：あまり刺激を与えないください。暴走し、周りに影響を及ぼす可能性があります。取り扱いには細心の注意をお願いします。

名前：亜差覇・蚊

能力：手先器用、「気合いでいける」の精神で！

見た目：暑苦しい、とろい、男です

性格：話に乗つかると鬱陶しい、基本だれてる、夢路に口で弱い

名前：夢路雪乃

性別：男

特徴：身長165くらい・眼鏡をたまに掛けている・体重が軽い・

口強

能力：家事全般・強運・口先の魔術師（笑）

ある日の学園（笑）

ここは鋼翼高校、のある学級。

この高校は偏差値も高いがある学級だけ特別な事で有名である。

その名は

「特別学級」

略称で「特級」

このクラスだけ特別、つまりは有名であるのだ。

このクラスには現在3人の生徒が居る。

少し中を覗いてみようか。

「ちよつと」

「なんか覗いてるけどいいん？」

「覗かれて困るのはお前の存在くらいやな」

「え……」

まずクラスの中心的なヤツ。

名前を「マンゴー プリン」

言わせてもらうと、かなり変わっている。

次に口がちよつと悪かったヤツ。

名前を「夢路 雪乃」

こいつも変わっている。

がまだマシな部類だ。

最後に見られてはいけない存在と言われたヤツ。

名前を「亜差覇 蚊」

気合いを連呼する少し面倒くさいヤツ。

とまあ、メンバーはこんな感じだ。

共通しているのは全員

「頭が悪い」

ということ。

つまりは、その面で有名なのだ。

というわけで

広報委員会でした。

- 夢路視点 -

「先生」

いつもと同じ日常、の筈があるヤツのせいでおかしくなった。

「どうした？」

「マンゴープリンの席にマンゴープリンが」

そう。マンゴーが居ないのだ。

こんな事は今までで初めてだ。

「ああ、それで良いんだ」

良いんだ…。

ということとで授業は再開された。

ピチャツ、ペチャ

「？」

何やら水っぱい音がする。

「どうした、マンゴー」

マンゴー？

隣の席を見るとマンゴープリンが勝手に跳ねている。

……え。

「ポルターガイスト…！」

亜差覇 蚊が叫ぶ。

言っではいけなかつただろ、それ…。

「正解だ。だが、その理論はちよつと間違っているな」
… 待て、なぜ分かるんだ先生!?

授業が終わつたらいつの間にかマンゴーは人間になっていた。
トランスでも使えるのか、こいつは。

「なあ、なんか面白い話しようぜ」

マンゴーはいつも適当に話題を振ってくる（無茶振り）。
だけどこの話題なら！

「じゃ俺から死亡フラグについて一つ」

二人は聞く態勢に。

「俺、この戦争が終わつたら結婚するんだ、という台詞は死亡フラグ」

二人共笑う。

よし、掴みはOKだ。

次に亜差霸蚊

「いや、この前さ」

くどくどくどくどくどくど…。

「長いわっ」

マンゴーがついにキレた。

まあ一時間も話されたらね〜

「そういえば授業は」

前を見れば、黒板に「自習」の二文字。

「自習か…」

亜差霸蚊は呟く。

そつなると暇になる。

「思つたけどさ、俺らそこまで頭悪くないよな？」

この高校が頭良すぎるのだ。

一般の高校であれば大体上位に入れるだろう。
と賑やかにしていたら隣のクラスから先生が

「少しは静かにしてろ」

の一言で一瞬にして沈黙した。

帰りのホームルーム。

「じゃあ連絡が二点ある」

珍しい、このクラスに連絡が舞い込んでくるとは。

「一つ目、このクラスに新しく生徒が入ってくる」

「ひゃっほい！」

マンガーが叫ぶが無視だ。

「女子かな？」

亜差霸蚊なんて論外だ。

「二つ目、明日からは先生はこのクラスに来ない」

「誰か新しく来るのですか？」

と聞いてみたらびっくり。

「このクラスに先生は来ない」

つまりは

「見捨てられたという感じですか？」

無言の肯定。

「ではこれにて解散、達者でな！」

後には呆然とした三人が残された。

ある日の学園（笑）（後書き）

どうでしたか？

この続きもしっかり更新されていくので楽しみにしてくださいね
では

また次に書くときまで！

夢路雪乃

転校生？　そして光の中へ？（笑）（前書き）

夢路雪乃から亜差霸蚊で行きますよ！

今回は転校生が来るぜ（笑）

ユーザー紹介

名前：あんぎゃーす

性別：女

特技：運絡みの遊戯・アクション以外のゲーム・家事全般

能力：豪運・危機察知

特徴：髪は脇辺りまでのロング・黒髪

多少男嫌いがあり、初対面相手は、緊張したり怯えたりするみたいです

名前：K

性別：女

特技：家事全般…あんぎゃーすと比べると全部が霞みます…

能力：人心掌握

特徴：髪型は季節によって変わるが、冬場はロング・夏場などは髪留めをもちいてのポニテ

名前：緋水

性別：男

特技：速読、ナチュラルに人の神経を逆撫でする。

しゃべり方：基本敬語。だけど知り合いにはため口。

特徴：眼鏡あり

名前：清浦刹那

性別：女子

性格：軽い人見知りでどこか冷めた感じの物静かな文学少女、だが数少ない友人達に害を為す等の自分じゃなく親しい人に何かあると熱くなりその人を全力で手助けする友達想いの優しい娘。

能力：弓道、合気道、料理（日本料理とお菓子）

転校生？　そして光の中へ？（笑）

鋼翼高校に通う3人、亜差霸蚊とマンゴープリンと夢路雪乃
そんなある日、転校生がやってきた。

「てかさ、転校生が来るとか言ってたんだけど」

亜差霸蚊が、夢路雪乃とマンゴープリンに話し掛けた。

「そっぴや言ってたな。ここに来るんだっけ？」

「みたい……」

亜差霸蚊と夢路雪乃は、想像を膨らませる。
そんな2人に、マンゴープリンが口を出す。

「この特級にねえ〜また馬鹿なのかなあ？」

「いやいやいや、俺らは馬鹿だけどさ……っつか馬鹿なのか？」

実際、この鋼翼高校は偏差値が半端ない。

むしろまともなクラスに入ってる奴らは神聖の馬鹿じゃねえの？
みたいなかんじ

実際、3人のテストの平均は60点を超えている。

「いや……普通の学校なら中の上くらいだよな」

「だよな……ここって平均93点超えねえと普通学級入れねえって

なんだよ……」

夢路雪乃が、鋼翼高校のシステムに疑問を投げ付ける。
だが答えは誰も言わずに、ため息だけが聞こえる。
そんな中を、亜差霸蚊が打ち破る。

「てか話戻すけどさ、転校生で女の子かなあ？　男子かなあ？」

その話には夢路（以下略）がのってくる

「そうだなあ、女子なら可愛い子だとよくね？」

そう言った夢路に被せるようにマンゴープリンが言い出す。

「もしかしたらゴリゴリマッチョかもしれないよ？」

3人はしばし想像する。

先生の後ろに、タンクトップを着て、学ランを肩にかけたむさ苦しいゴリマッチョ……

堪え切れずに亜差霸蚊が叫ぶ。

「いやだああああ！　そんな学園生活はいやだああああ！」

「俺も願い下げじゃああ！」

夢路がつられて叫んだ時、教室の扉が開き隣のクラスの担任が顔を出す。

「おい、おまえら、少しうるさいぞ」

怒っているのかわからない顔で怒られても……
3人は渋い顔を見合った。

しばらくしてその先生は帰って行った。

「んでさっきの話だけだよ」

「俺は女の子に一票！」

夢路がどこからともなく出したチョークを片手に黒板に”女子”と大きく書き出す。

「俺も女子に一票」

亜差霸蚊も1の数字を消し、2と書く。

「じゃあ、あえて男で」

マンゴープリンは真面目に黒板に書き出した。

「ちよっ……お前……」

亜差霸蚊と夢路は、すごく嫌な顔をしながら互いを見合っ

そんな時、廊下を歩く音が聞こえてきた。

「来たか！」

三人は席に戻る
そして引き戸が開き。
一人入ってくる。

「よっしゃあ女の子……」

亜差霸蚊が机に足を乗せて喜ぶが、語尾が伸びていく。
理由は簡単だ

「また女の子だ……」

夢路がつぶやく。

そう、転校生は女の子が二人だった。

「と思つたら男子が一人」

マンガープリンは女の子二人に続くように入ってきた男の子を見
逃さなかった。

「えと……女が2で男が1」

亜差霸蚊は黒板にデカデカとかかれた数字と、教卓前に並ぶ三人
を交互に見つめる。

「俺ら……ある意味天才だな」

亜差霸蚊の小さなフリは誰にも相手にされなかった。

「じゃあ自己紹介お願いします」

そんな中を夢路が取り仕切り出す。

……でしゃばりやがって……

「何か言ったか？ 天の声」

……滅相もございません……

「あつ……です」

1番先頭から入ってきた女の子に紹介を求めた。

だが返事はない……

ただの屍のようDA

「って違う！ もうちょい声出ないかな？」

「あ……ごめんなさい。あんぎゃーすです」

黒髪のサラサラした髪の女の子だよ

「あんぎゃーすさん……と」

「あつ私はKって言います。よろしくですね」

一人目と対照的にすっごい明るい

髪留めをしてポニテにしている女の子。

「Kさん……最後か」

何故かその場にいた皆の目が集中する。

「え？ あつ、えつと〜（気まず過ぎんだろ〜）……えと、緋水
って言います。よろしくです」

眼鏡をかけた男の子

「ふむ……あんぎゃーすさんにKさんに緋水さんと……なら次はこ
っちか」

夢路が椅子を下げて立ち上がる。

「夢路雪乃です。まあ趣味は家事全般です。これからよろしく」

職業は家事手伝い……

「ニートじゃねえ！」

夢路は天の声にツッコミを入れ、さつと席につく。

それに続いて亜差霸蚊が立とうとしたのを、マンゴープリンが手
早く立ち上がる。

立ち上がり際に亜差霸蚊の方をちらつと見ると、勝ち誇ったような
嫌な笑い顔を見せる。

「えっと、俺はマンゴープリン。実は眼鏡が本体で。誰とでもフレ
ンドリーなのが特徴かな。まあこれからよろしくなあ」

亜差霸蚊は最後になり、立ち上がる。

「さて……最後になりましたが……」

「あっじゃあ、あんぎゃーすさんそこで、その後ろにKさんで……
緋水さんは」

「あの、聞いてます?」

亜差霸蚊の自己紹介そっちのけで席をきめだす夢路に亜差霸蚊が
水を差す。

そして夢路は亜差霸蚊の顔を一瞬見ると口を開いた。

「えっ? いる?」

「あつ、あ……寝ます」

亜差霸蚊は机に突っ伏し、眠り出した。

「まああれは変な奴。適当にあしらっちゃっていいから」

夢路の酷い紹介を気にすることもなく眠り続ける。
と……思ったが体を起こした。

「ねえねえ、三人つてどっからが苗字でどっからが名前?」

亜差霸蚊の素朴な疑問に少しでも考えた表情をする三人
その中でKがまっさきに口を開く

「私は、わかんないや」

「ならあだ名が頭文字Kか……よしニシャルがあだ名だ」

Kは、マンゴープリンの意味のわからないあだ名決定にあたふたする。

てか……イニシャルって呼ぶならKのが短いし……

「じゃあ、あんぎゃーすさんは？」

亜差霸蚊が次にフッタのはあんぎゃーす

「私は……」

「何て言ってるか聞こえませーん！」

「え、あ、ごめんなさい。私はミドルネーム……です」

「今の一瞬の間は？」

「はいはい……亜差霸蚊いきなり虐めない」

「え？ 今の虐め扱いっすか？」冗談きついつすよ。夢路」

そんなときだった。

また教室の扉が開く。

「すみません、遅くなりましたあ」

一人の女の子がかけいつてくる。

「もしかして転校生？」

ここは緋水が仕切る。

「はい、今日からここに転入になった清浦刹那です」

ペコツとお辞儀する。

「俺は緋水です。俺も今日から転入なんで転校生同士仲良くしまし
よう」

緋水の爽やかな挨拶が済んだところで次々と挨拶を交わしていく。

「なあ夢路」

「どうした？ 亜差霸蚊」

「ああ、さっきの俺の感動はなんだったんだ？」

「奇遇だな。俺もそう思ってた所だ。「俺ら天才じゃね？」とかほ
ざいてた奴がバカみたいだわ」

7人の内で、元から居たチームの機嫌は悪くなる一方だった。

「あのゝえと夢路さん？ ですね？ 先生は来られないんですか
？」

刹那はガチで勉強しに来ているようだな。
ご愁傷様

「この名前読んだか？ 特別学級だな」

「縮めて特級でしたな」

「その真実はな……先生達に見放されてんだよ」

その一言に転校生四人が一斉に振り向き、口々にマジか？と呟く。

「だから適当に先生役回してたんだよ。テキストはくれるからさ」

亜差霸蚊が言った言葉にしばし沈黙する。
それからKが口を開く

「なら……何やってても自由ってこと？」

その問いにはマンゴープリンが返す。

「まあ、そういうことだな。ただ他クラスの邪魔さえしなけりゃな」

こうなったらやることは一つ……

だらけるしかないじゃないか

「することないから暇過ぎるな」

マンゴープリンが言う。

その時だった。

地面が揺れたような衝撃が皆を襲った。

「地震？」

あんぎゃーすはKと二人で身を屈めながら詮索する。

「わからん、おさまるまでは立たない方がいい」

緋水の指示が正しいにもかかわらず

「やべ、地震楽し！」

亜差霸蚊やマンゴープリンは、はしゃいでいたりする

「あの、二人とも？」

刹那も屈みながら二人を押さえようとするが、聞く耳すら持っていないかったり

亜差霸蚊達のはしゃぎ回っている時、何かにぶつかったように大きく揺れた。

屈んでいたメンバーは問題なかったが、はしゃぎ回っていたメンバーは吹っ飛ばされていた。

その中、マンゴープリンはリアルマンゴープリンに変化していたのか知らないが、壁にぶつかり四方八方に散った。

「マンゴー……プリン。マンゴー!!」

亜差霸蚊の叫びはマンゴープリンに届いたのだろうか？

散り散りになったマンゴープリンは、徐々に互いを引き合うように合体していく。

「うわっ、キモっ！」

「流石はマンゴー」

亜差霸蚊と夢路が妙に納得する。

「いやいや、そうじゃないでしょ？ マンゴープリンさんどこ行っ
たんですか？」

緋水のツツコミは内部事情を知らなければごもつとも
亜差霸蚊達は、固まりつつあるマンゴープリンを指差す。

「これ」

二人とも口を揃えて言った。

転校生組は意味がわからずにキョトンとする。

その目線の先にあるマンゴープリンの集合体は、うねりながら人の
形を作り、輪郭等を浮かばせていく。

そして人の方のマンゴープリン（ややこしいな……）に戻った。

「お疲れ」

マンゴープリンが言った言葉に辺りはしんとする。

「ねえ、あんなところに木なんかあったっけ？」

刹那が声を上げ、皆がその方を見る。

「あつたかな？」

「なかったんじゃない？」

口々に困惑する。

「とりあえず外に出ましょう」

Kの機転により、一時的に静まり外に出た。

「ここ……学校じゃねえよな？」

教室を出たら廊下のはず
なんだが……何故か光の中に出た。

「ここ、一体どこだよ？」

皆は光の中を歩き回った。
だが何も手掛かりになるものは見つからなかった。
その時、光が急激に増し、一行は光に包まれた……

転校生？　そして光の中へ？（笑）（後書き）

さあてさあて

次はマンゴープリンさんですよ

締め切りは

7月7日夜23時59分59秒までだから気をつけろ

まあまだ序章ですよ

次辺りは、飛びますぜ

BY 亜差霸蚊

異世界からこんにちは？（前書き）

今回はマンゴープリンさんですよ

どうも！ 今回執筆したマンゴーです！

後半ちよつと真面目な話が入りますが、見てってください。
それでは、どうぞ！

異世界からこんにちは？

「っ……何だっただんだ今の……」

どこかの高校の物だろうか？ 変わった制服を着た背の低めな青年——夢路 雪乃——がぼやきながら起き上がる。

「おい！ 皆大丈夫か？」

「はい、こっちは大丈夫ですよ」

「あんぎゃーす大丈夫？」

「うん、平気。怪我は無いみたい」

「さっきのは何だっただんでしょうか？」

雪乃の新しいクラスメイトである緋水、K、あんぎゃーす、清浦刹那の4人の声は聞えるのに、残りの2人の声が聞えない。辺りを見渡すと、先ほどいた教室や光の中とは違う木々が鬱蒼と生い茂っている所に皆、投げ出されていた。

「どこだよここ……教室も無くなってるし。はあ、まずはあいつらを探さないとな」

先ほどから起こる超常現象にため息を吐き出す。

「あの、ちょっと前まで騒いでた2人がいないんですけど？」

「ああ。多分その辺転がってると思うから皆で探してくれないか？」

「投げやりですね……」

馬鹿2人に対してもちゃんとしている刹那とは反対に、奴らのしぶとさを知ってる雪乃は投げやりな態度。そんな雪乃の態度に緋水は苦笑が漏れる。

「全然いないね」

「そうだね。そこまで遠くに行った訳じゃないはずだからすぐ見付かるはずなんだけど」

あんぎゃーすとKは2人を探しながら先ほどあつた超常現象のついて話し合っていた。

「さつきは本当にびつくりしたよ。だっていきなりマンゴープリンさんがマンゴープリンになるんだもん。あの人って男の人っぽいけどそもそも人間なのかな？」

「わ、私に聞かれてもわからないよ。……一応人間なんじゃ？」

Kは自信なさげに首を傾^{かし}げる。

「そうなのかなあ……。それにKって変なあだ名付けられてなかった？」

「うん……頭文字Kイニシャルって。どこから頭文字イニシャルって出てきたのかな？」

「それは私が説明しよう！！」

「ッ！！ きゃあああッ！！！！」

突然後ろから聞えてきた声に驚き、あんぎゃーすは思わず肘打ちを繰り返す。するとどうでしょう！ あんぎゃーすの肘は吸い込まれる様に後ろの人物の顔面にめり込む！

CLEAN HIT！ WIN あんぎゃーす！

どこからとも無く軽快な音楽と共にそんなテロップが現れる。

「なにになになになに？！ 何があつたの？！ さっきの誰？！ 男の人だったよね？！」

「ちょ、ちよつと落ち着いてあんぎゃーす！ 大丈夫だから！ 私が付いてるから！」

少しパニックを起こしているあんぎゃーすを落ち着かせようとするが、K自身も内心物凄く焦っていた。

「い、痛え……。蹴りかパンチだと思つてたのに肘打ちが来るとは予想外デス。俺じゃなかったら死んでたで……」

先ほど吹き飛ばした人物が起き上がったことに2人して抱き合い

警戒していたが、よくよく見ると自分達と同じ高校の制服を着ているし、どこかで見たことのある顔をしていた。

「も、もしかしてマンゴープリンさん？」

「マンゴーでいいぜよ。……それで2人はなぜこんなところに？」

マンゴーの質問に、さっきまで吹き飛んでた目的を思い出す。

「2人を探してたんですよ！ 何処どこ行つてたんですかもう！ もう一人の方は何処にいるんですか？」

「え？ 亜差あさはか霸蚊はかか？ さあ知らね。その辺転がってんじゃねえの？」

「マンゴーさんも夢路さんもなんでそこまで適当なんですか……」

「まあ、あの2人のしぐとさは知ってるんでな。男友達つてのはそんなもんやつて。残りの4人相手なら真面目にするけどね。それと『さん』はいらねえぜ。こっちも呼び捨てにするとしうし」

「おいおい考えていきます……。それなりに時間もたつたし、一旦皆と集合します？」

「そやね、もしかしたら向こうで亜差霸蚊見つけてるかもしんねーし」

そこで話は中断し、3人で先ほどまでいた場所に戻った。

集合するとすでに亜差霸蚊は見付かっていた様で、何とか皆集まることが出来た。

今現在は、先ほど刹那が見つけたと言う開けた場所に向かって移動中である。

「結構順調なんじゃねえのかこれ!!」

「お前が居なくなかったらもつと順調だっただろうな」

亜差霸蚊の言葉は雪乃にぱつさり切り捨てられる。

「ホンマやで。お前が行方不明になるからや」

「いや、お前にだけは言われたくねーよ!」

そんな3人のやり取りに、置いてけぼりの4人は苦笑するしかなかった。

そのまま数分も経たないうちに、先ほど見つけた開けた場所に出る。そこは整備された道のようで、道の左右は桜が咲き、一定間隔で街灯にベンチ、レンガ造りの花壇が並んでいる。

「さっきまで居た所は林だったんですね」

「うーん……そうだね……」

刹那が確認するように声をかけるが、緋水はどこか気の無い返事をする。

「どうしたよ? 変な顔して」

「変な顔って……。いえ、ただどこかで見たことあるような？」

緋水の顔を覗き込んでいたマンゴーや他の5人ももう一度周りを見渡してみる。

「あー。確かにどっかで見たことあるような？ 分かるせっちん？」

「いえ、あまり。……………『せっちん』？」

何か変なあだ名を勝手に付けられたような気がして見返してみるのが、ただうんうん唸ってるマンゴー姿しか見えなかったので、ただの聞き間違いか、と記憶の底に沈める。

「しっかしどうすつかねえ。ここがどこか分からなかったらどうすることもできねえし」

「うん？ 君達、一体こんなとこで何をしてるんだい？」

「……ん？ 誰ですか？」「」

「何奴?!」

雪乃が呟いた時、後ろから声をかけられて全員反射的にそちらを向いてしまう。約一名、亜差霸蚊だけはどこか別の時代に飛ばされたようだ。

「——あ！」

「うん？ 僕の顔に何か付いてるかい？」

誰の声か分からないが、思わず声が出てしまうのは仕方ないことだろう。そこに居たのは、ぴっちりとスーツを着こなし、無精ひげを生やしたメガネの男――タカミチ・Ｔ・高畑。

知る人ぞ知る、マンガ『魔法先生ネギま!』の主要人物の一人。

「（なるほどね……ここはエヴァがのどかを襲った桜通りか。それなら雪乃と亜差霸蚊が気づかない訳だ。確かあいつらそこまで詳しく呼んでなかったはずやし）」

二次元の世界に移動してる事や、目の前に主要人物が居るのにもかかわらず、マンガのワンシーンについてあれこれ考えるあたり、マンガの脳味噌の腐り具合は分かるだろう。

「ああとすいません。僕達鋼翼くわよく高校の者なんです、麻帆良学園の学園長に話があって着たんです」

マンガは一步前に出て0円スマイルを浮かべながらさらっとウソを吐く。

「学園長に？」

「はい。……聞いてませんか？」

「いや、初耳だね……」

タカミチは首を傾げるのも無理は無い。そんなもの存在しないのだから。

「そうですか。僕達の高校とそちらの学園で何かサプライズをする

と聞いてたんですが？」

「あー……サプライズね……。学園長はお茶目な所があるから、決行数日前になつてから教えられるなんて事があるからね……」

「そうだったんですか！ 先に知っていたおかげで心の準備が出来ましたね」

そうだね、と言う言葉を聴きながら内心胸を撫で下ろす。原作でも度々（たびたび）無茶振りを要求されているような描写があったのでそれに賭けてみたんだが、上手くいったようだ。

はつきり言つてここで疑われたりするとどうしようもなくなっていた。

「（おい。何か話変な方向向かつて行つてないか？ 大丈夫かよ？）

」

「（今ちよつとした考えがあるんだよ。ここは俺に任せてくれるか？）」

心配して小声で話しかけてくる雪乃に、安心させるように大丈夫なことを伝える。

「（先に謝つとく。この後無茶するがもし失敗したりなんかあったらすまんの。ついでに他の皆に上手く空気を読んで行動してくれるのも伝えといて）」

「（ちよ、おい！）」

雪乃は止めようと手を伸ばすが、もうすでにマンゴーはタカミチ

の横まで歩いていつてしまった。

—マンガー視点—

思い切って行動してみたら予想以上に上手くいつてしまったせいでかなり焦ってる。元々その場を無茶苦茶に引つ掻き回して雪乃に丸投げしようとしていたのに、何故か上手くいつてしまった。

てか、なぜ得体の知れない俺の言葉をこつもあつさりと思じるんだこのひげは！ 『そんな高校は知らない』やら『そんな話は信じられない』とか突つ込みどころ満載だったろ今の会話！ アレか？もしかしてほんとに鋼翼高校があるのか？ …… それはまずい。二次元の世界だから無茶苦茶やってるがもしここが二次元と三次元が混ざり合つた世界ならどうしよう……。ま、いつか。

マンガーは思考放棄した。

「後ろの子と話していたようだけどなにかあつたのかい？」

「いえ、なんでも無いですよ。ただ道に迷つてしまつてどうしようかと相談していたんです」

「そうなのかい？ なら丁度いい。僕も学園長に用事があるから、連れて行つてあげるよ」

「そうなんですか？ どうもありがとうございます」

何とかしてタカミチ先生に学園長室まで連れて行つてもらおうと

していた所だから渡りに船だ。しかしさつきから上手くいき過ぎだ。後ろの誰か激運でも持つてるんじゃないだろうか？

そんなことの前に、まずは情報を集めねえと。

「そついえば今日何月何日でしたっけ？」

「ん？ ー2月26日だね。ほら」

タカミチは自分の腕を捲くり腕時計を見せてくれる。そこは2003年2月26日と指し示していた。

年月日を知れたことは大きい。それさえ分かればいつぐらいに何があったのかはわかる。だいたいネギがここに赴任してきたのは2003年2月上旬のはず。1ヶ月ぐらい経ってたら話題性抜群の子供先生の噂が広まっけていても変じゃないやろ。

「すいませんね。日にちなんて気にしない性質たちなもんで」

「ははは！ まあ男の子ならそんなものだろうね！」

原作見て知ってるが、気さくで話しやすいタイプだと再認識する。

「それと、ここには子供先生がいると噂に聞いたんですけど、本当なんですか？」

露骨に『そんなのウソだろう』と表情に出して聞くと、爽やかに笑って噂が本当だと肯定してくれた。

「まだ正式に先生と決まった訳じゃないけど、彼ならきつと立派な教師になれるよ」

「『彼』って、砕けた言い方からしてそれなりの仲なんですか？」

「ああ、そうだね。それなりの長い付き合いになるのかな――」

その後は聞いても無いのにネギの事を話してくれた。多分、いまのタカミチは自分の息子を自慢する親のような気持ちなんだろう。そんな自慢ははっきり言ってもいいが。魔法のことは隠していたが、話を聞く上ではネギは原作通りのようだ。

そんな風に他愛の無い話をしていると、いつの間にか学園長室の前まで来ていたようだ。

タカミチが勝手に話していた間に頭の整理はつけた。今からすることを後ろの6人が知ったら怒るだろう。だがここまできちまったらやめない。これは俺の我俣^{わがまま}で、自己満足。奴らの下に付きたくないし、こき使われるのも嫌だからする。まあ、失敗したときはせめて女子だけは逃がそう。

「高畑です。学園長にお客様がいらっしゃってますよ」

「ふむ、何かあったかの？ 入ってくれてかまわんよ」

タカミチが軽くノックし声をかけると、中から？マークが付いたようなおじいさんの声が聞えてくる。

タカミチを先頭にずらずらと中に入っていくと、学園長の不思議そうな顔が見えてくる。そのまま俺が一步前に出て後の6人は後ろに横一列に並ぶ。

「学園長。こちらが鋼翼高校の皆さんです」

「うん？ それはどこの高校じゃ？」

タカミチと学園長である後頭部が長く、妖怪ぬらりひょんにしか見えないじじい——近衛^{このえ} 近右衛門^{このえもん}が顔を見合す。

このままほつといて対策とられるとまずいのでこっちから強引に話を進めようか。

「すまん。 ちょっとここには話し合いしにに来てん」

突然馴れ馴れしく声をかけたからだろう、2人とも驚いた顔で振り向く。

「話し合い……じゃと？」

「そそ、話し合い。 ……うーん、実際は脅しに来たんやけどな！」

「——っ！！」

前からも後ろからも息を呑む音が聞える。 そりゃそうか、教えてないからな。

「お前ら手え上げる！ 生徒がどうなってもいいんか！」

ポケットに手を入れようとしていたタカミチを睨みながら叫ぶと、2人とも『生徒』の部分に反応し手を上げる。

まずは何とか大丈夫、直ぐには攻撃されない。 今のうちに畳み掛けるか。

「貴様、何のつもりじゃ」

「だから言ったる。 脅しに来たって」

「その人数で何ができる！ 教師を脅しても得にはならないぞ！」

「はッ！ ここにいる人数が全員とか思ってんじゃねえだろな。それに、俺が話したいのは教師のあんたらじゃなく、『魔法使い』のあんたらだよ」

「なっ！？」

叫んでいたタカミチが驚愕に目をむく。こんなどこにでも居そうな一般人が、秘匿されている魔法のことを知っていたら驚くだろう。驚いてもらわなくちゃ困るんだけどね。

「何が望みじゃ」

「今から言う事に無条件で従え」

「っ……！ そんなこと無理に決まっているだろ！」

「てめえに話してねえよタカミチ。で、どうすんだい学園長」

「従う理由がないじゃろ」

「ふーん……。生徒の命だけじゃ足りない。ならそうだな……噂の子供先生では？」

「どう言う事じゃ？」

「子供先生ってネギ・スプリングフィールドだっけ？ かの有名な英雄、ナギ・スプリングフィールドの一粒種」

2人の顔が苦虫を噛み潰した様に歪む。この時期ネギとナギの関連性を知っているのは、ここの2人にネギの姉と幼馴染、それに少しの魔法先生のはず。得体の知れない俺達を知ってたらさぞかし怖いだろう。

「どこでそれを知った」

「そんなこと言う訳ねえだろ！　　と言いたいところだが、こっちが全部知っていてそっちがなんも知らないのは面白味に欠ける。ヒントをやるう。考えたら分かることだが、俺達の後ろにはそれだけの組織があるってただだ」

余裕たつぷりの嫌な笑みを浮かべながら言い切る。それほどの余裕を持つほどの組織があるように思わせているだけで、実際はそんな組織なんて無い。だが、2人にはそれを知る術は今はない。

この話し合いが終わったら直ぐに調べるだろうが、そんな組織が見付からなければ、人間のとる行動は二通り。組織は無いと決め付けるか、自分達では調べられないほどの組織か。

この2人は後半だろう。なぜなら、2人が所属している組織も、誰にも知られること無く隠匿されたモノだから。

この2人は特に、自分達の知らないことは無い、と思いつくことも無いだろう。学園長であり、関東魔法協会理事である妖怪はなおさらだ。

「ネギでなにするか教えといった方がいいかい？」

「そうじゃの。対策を練るのに必要なことじゃからの」

ふむ。じじいは無駄口叩けるくらいには回復したか。

「簡単な話だよ。ネギは英雄の息子。英雄とは何か、それは自分達の国を守ってくれたヒーロー。言い換えれば、敵国の人間を大量虐殺した殺人鬼。息子を殺された敵国にネギを差し出すとどうなるんだろう♪ 試してみたくない？」

「この外道が!!」

どっから声でえんだって言いたくなるぐらいの大音量で叫ばれる。しくった、ついやりすぎた。挑発しすぎて突拍子もないことされるとどうしようもない。まだ経験の多い学園長だから良かったものの、これがガングローニ先生だったわけ？ のような人なら襲ってきてる。

それに怒鳴ってくれたからタカミチがこっちに飛び掛ってこなかった。多分タカミチを止める為って意味合いも含まれているんだろう。ここで俺を襲ってたら何が起きるか分からない。学園長は穏便に事を進めたいはず。

しかし、痛い。前から来る今にも殺されそうなほどの殺気も怖い。が、後ろからの視線が痛い。

亜差霸蚊はどうでもいいとして、雪乃なら数個文句言われて終わるだけだろうが、後の4人が怖い。

刹那は真面目そう。ただ真面目なだけじゃなく、正義感や真つ直ぐな志から来る真面目さだから、めっちゃ怒ってるかも。

あんぎゃーすには避けられてる？ 刹那とは普通に喋ってたから人間嫌いじゃないんだろうが、びっくりさせたりなんか色々余計な事しちゃった気がするし、今後完全に嫌われる確立が高い。

Kにいたっては俺、勢いで変なあだ名つけちゃったし……。
緋水にいたってはまだ壁がある感じだし……。

……俺、殺されるかも。いや、大丈夫、大丈夫。大丈夫？
……皆を信じよう。そして謝ろう。

仲間がいるはずなのに孤立無援状態で泣きそうになるが、今はそれどころじゃない。なんとしてもこいつらを利用できるようにしないと。

「あんまりハッスルし過ぎるとしんじまうぞ？　まあ、話を聞く理由は出来たかい？」

「っ……。貴様のことだから断らせる気は無いんだろう」

「分かってんじゃん。俺達からの要求は主に4つ。衣食住の確保、お金の援助、身分証明偽造、それと学校に通うこと」

「ん？　その全て自分達の組織から配布されるものじゃないのかの？」

「足が付かないように徹底してるからな。協力はしてくれても助けはくれない。しかも有料ときたもんだ。それなら高い協力代払ってでもここを占領して利用した方がお徳なんだね」

「もしワシらが断ったらどうするつもりじゃった？」

「断わらさねえよ。その為に高い金払ってんだ」

俺達の要求がそれほど突拍子の無いものと分かると、気が削がれたのか先ほどの勢いがなくなってる。

「ふむ、それぐらいなら面倒を見てやろう。しかし、最後の『学校に通う』とはなんじゃ？」

「そのままの意味や。組織で必要最低限の教育させられたただけなん
でな。折角学校にいるんだから通ってみたいじゃないか」

「そうか……」

笑顔で答えてやると、何を勘違いしたのか生暖かい優しげな目で
皆を見つめる。

俺達のこと孤児なんかと思ってんのか？ まあ、勘違いさせてい
た方が後々いじりやすいからいいか。

「そうじゃの、おぬしらの住むところじゃが……」

「そこもこつちが決めさせてくれ」

俺の言葉に眉をひそめるが文句は言っていない。言えないだけか
も知れないが。

「通う学校は麻帆良学園本校中等部のネギ・スプリングフィールド
のクラスで、そのクラスの生徒が泊まっている寮に広めの部屋を3、
4部屋横に全部連続で並ぶように」

「なっ！？ 君がなにを言っているか分かっているのか？！ 彼の
クラスは女子校で寮も女子寮だよ？！ 女装でもするのかい？！」

そんなこと言われなくても分かっているよ。女装なんて誰がするか
それでもこのクラスに入らないといけない。なぜなら、二次元です
ることって言ったら原作介入だろ！！

マンガーは心の中で拳こぶしを振り上げる。亜差霸蚊にはその拳が見え
たとか何とか。

「クラスに入る理由はそつちで考える。『共学になったときの予習』
とでも言っとけばいいだろ。若しくは魔法で洗脳。寮はネギと同じ
で始めは場所が出来るまでの間とか言っというてそのまま崩し
に行けばいいだろ」

「しかし君は男だろう」

「寮の部屋は端っこにして認識障害でもかけとけ。亜差霸蚊はとも
かく俺達が覗くわけ無いだろ。逆に殺されるわ」

それに同じ寮なら女性陣は大浴場でより話す機会もあるだろうし、
あの寮は部屋にも風呂が付いていたから男はそこに行けばいい。
いきなり訳分からんところに放り出されたんだ。やっぱ男4人と
いるより女友達を作って女同士で盛り上がった方が女子にはいいだ
ろ。

……俺達が変体のレッテル貼られる危険と隣り合わせだがな。

「ほっほっほっ！　そこまで行きたいんじゃないやったら手配しておくぞ
い」

「何だじじい、なんか言いたそうやな」

睨み付けるがじじいはずっと、ほっほっほつと耳障りな笑い声を
上げるだけ。

「気持ち悪いな。タカミチ先生、案内してくれよ」

「おぬしらの名前をまだ聞いておらんが？　これでは身分証明がつ
くれんの」

あーそうだった。と思い出し、さつさと皆の名前だけ教え、詳しい自己紹介は個人でやることになった。

俺の体は先ほどまでの緊張が解け、今にも倒れそうなほどふらふらだった。

「それらが本名かの？」

「奇抜な名前が多いがそこら辺の判断はそっちに任せる。後は頼んだぞ」

その後、皆でタカミチの後を追うようにぞろぞろとその場を後にした。

異世界からこんにちは？（後書き）

今回はギャグでは通せない真面目な話が来たときの予備です。

ギャグだけで進めていくと、物語の肝心なところで後ろ盾が無いと困るので、今回はその後ろ盾としても、駒としても使える存在を作りました。

後、必要不可欠の衣食住にお金、身分証明などの作成。

Kさんの人心掌握を使ったり、一時的に口先だけで騙したりすることとも出来たんですがね。

操っていて突然その効果が切れても困るし、一時的に騙す詐欺まがいの当て逃げなんかは一回すると後が無いので、何回でも使える、がっちがちに固めて脅すことにしました。

おもいつくそ自分が悪者になりましたがね。

巻き込んだみんなすまん（泣）

そんな感じの三話でした。

次回執筆あんぎゃーすさん！

日にちは7月12日まで

吸血鬼との邂逅。もしくは読者サービス。（前書き）

今回はあんぎゃーさんです（＜ー＞）
ちょい修正入りました

やりたいことやったらこうなった。反省はしているけど後悔はしていない。

まだ他ユーザー様の特徴掴みきれていないので、キャラが違つとかはご勘弁を。

とりあえず色々g d g dなのは仕様。

B y あんぎゃーす

吸血鬼との邂逅。もしくは読者サービス。

「「「「「……………」」」」」」

「…その目をやめろって…俺も無茶したのはわかってるから……………」

色々と説明を求める5人の視線がマンガープリンにグサグサと突き刺さっている。

唯一視線を向けていないのは私。

まあ呆れてものも言えないだけだが。

「わかってるって…ちゃんと説明するから…住む場所についたらちゃんと全部話すから…」

根負けしたのか、ガクリとうなだれる。

あの状況では仕方なかったとはいえ、少しは説明をしてほしかった。もし交渉失敗してたら恐らく私達は既にいないと言うのに…まあ、そこは褒めるべき所だろうか？

おっと、とりあえず今の状況を説明しておこう。

交渉（？）が終わって、今はタカミチの後ろをついていつている。住む場所までは少し遠いらしいので、まだ少し歩くだろう。

「はは、何か楽しそうな話をしてるね。よければ僕も混ぜてほしいんだけど…」

(K)

(打算無し。恐らく本心から。これから色々と世話をしたりすることになるかもしれないから、コミュニケーションを深めよう、って所かな)

(ありがと)

「マンゴーさんどうします?」

「あー…えーんとちゃうかな?俺疲れた…」

Kとマンゴーに確認を取る。

「他の方は?」

「構わんぜよ!」

「別にいいと思うが」

「お任せします」

「はい…」

賛成3、無効票3。

「という訳でどうしました?」

「…君達は仲がいいのかい?悪くは無さそうだけど…」

「んー…仲良し?」

六人に目を向けると、

「俺と亜差霸蚊と夢路は親友だぜ？なあ！」

「おうともさ！」

「えっ…そうだったけ？」

「えっ」

「えっ」

最初からクラスにいた三人は仲良しっぽい。

「僕は途中参加であまりこの人達と話したこと無いし…まあ、これから仲良くなればいいかなー、って感じですかね」

「私も…はい」

それを聞いた瞬間、高畑の目が悲しそうに歪む。

恐らく変な勘違いをしたのだろう。

「私とあんぎゃーすも途中参加だよー。」

でもあんぎゃーすは私とずっと仲良しだよねー」

仲良しというか…恋人？」

「ち、ちが「うそ、マジで!？」だから「ちょ、リアル百合!？」」

待って「興味は…あるな」人の「はっはっは、仲良しですね」おま

「…お姉様と呼んでも？」人の話を聞けーっ!!!／／／」

そのままぎゃあぎゃああと騒ぎつつ、一路住み場所へと足を運ぶ私達であった。

「「「「「「……えー」」」」」」

「ん？どうかしたかい？」

「何固まってるんだ？マンガーも他の皆も」

「さあ……」

亜差霸蚊さんと夢路さんはあまり「ネギま」には詳しくないみたいだ。

詳しくかったら私達と同じ反応をするだろうから。

「流石にいきなり女子寮に住ませるのは無理だったよ。部屋数の問題もあるし、説明も無しに男子が入ると他の子達が色々……ね。だから女子寮の都合がつくまでは、しばらくここに住んでもらう事になったよ。ごめんね。」

でもここに住んでいるのは君達のクラスメイトになる子だよ。

優しい子だから心配しなくても大丈夫さ」

いや、貴方はそうかもしれませんが……

女子寮からそこまで離れていないログハウス。

これってどう見ても……

「（コンコン）エヴァ、いるかい？件の一時同居人達を連れて来たよ」

……ここまで予想通りだと、溜息通り越して笑います。ハッハッハ。

……ちょっとは逃避させてください。

「（ガチャ）……タカミチか。ジジイから話は聞いたが……私はまだ了承した覚えはないぞ？」

それに…「何人か」とは聞いたが、7人も来るとも聞いてないんだが？」

「まあまあ…学園長もかなりのお歳だし、そういう事もあるさ。それより、部屋って大丈夫かい？この通り7人もいるんだけど…」

「一応、使わない大部屋は二つほどあるが…家具とかは無いぞ？」

「ベッドだけは別の寮から人数分運んで来るから大丈夫だと思うよ？まあ数日だけだし…勘弁してくれないかな？」

「…ジジイは後で絞めるが…仕方ない、いいだろう。ほら入れ、その7人」

「……あ、は、はい……」

いまだに呆然としている4人と、首を捻る2人。タカミチを除いた全員でエヴァの家に入る。

「それじゃあ、また来るよ」

「二度と来なくていいぞ。あと、ジジイに覚えておけと言っておけ！」

「あ、あはは……」

初っ端から死亡フラグ満載。さてさて、どうなることやら…

「茶々丸、お茶の用意だ。上等なものを選んでおけ」

「了解しました、マスター」

リビングに通された私達一行。

中はかなり広い、中くらいのパーティーなら出来そうな広さだ。

…中くらいのパーティー？同窓会よりちょっと小さいくらいだろう。

「さて、茶々丸が紅茶を運んでくるまで少し話をしよう」

「あれは今から36万…いや、1万4000年前だったか」

「話を聞く気があるのかっ!？」

「あるよ、何言ってるの？」

まさか私達が人の話を聞かないような愚かな人間だとも思ったの？馬鹿なの？死ぬの？」

「一思いに殺してやろうか愚かな人間っ!？」

…やばい、楽しい。

だって、「話をしよう」って言われたらそりゃあエ。シャダイネタで返さなきゃ失礼でしょう。

「さて、冗談はここまでにしておこうか」

「一回殴らせる貴様!」

「だが断る。」

まあそんな事はどうでもいいんだ。
とりあえず自己紹介した方がいいかな？」

「…ふん、まあいい。私は寛大なんだ。
それよりか、そちらで固まっている奴らはいいいのか？」

「体は小さいのにね。
今起こすよ。ほら皆ショック受けたのはわかったから、とりあえず
自己紹介しようじゃないの」

「殴るぞ貴様っ！」

「はいはいデジャブデジャブ」

「がーーーーっ!!」

からかいつつ、いまだに色々思考混濁している4人と暇だから寝た
2人を起こす。

「せいっ」

「ゴフウッ」↑マンゴーwith全力腹パン

「いてっ」↑緋水withチョップ

「あいだだだだっ!？」Kwithアイアンクロー

「…はっ!？」↑清浦刹那with頬ぺちぺち

「腕が擦切れるように痛い!」↑亜差霸蚊with腕捻り

「ぐええっ!？」↑夢路雪乃with腕捻り

「目、覚めた？ほら、そしたらとつとと自己紹介する！
ずっと私だけに話させて…」

「……あー…あはははは…」「」「」

随分楽しそうでしたね、とは口が裂けても言えない一行であった。

「…ずいぶんとまあ変な名前の奴らばかりだな」

「そこはまあ気にしたら負けって事で一つ」

「こちら、紅茶になります」

全員の自己紹介を終え、続いてエヴァ達の自己紹介に移る。

マンガーがリーダーだと言った瞬間、全員が「えっ」て言ったのは
お約束だと思う。

「さて、何人か私の正体に気づいているようだが、まあ自己紹介し
てやろう。

我が名はエヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マグダウエル。
600年を生きる真祖の吸血鬼だ！」

ババアーン、と効果音が鳴った気がした。

「うはぁ…この学園にいるとは知ってたし、何と無くはわかってた
けど、よりによって『闇の福音』か…」

「ほう、私の事を知っていたか…確か、マンガープリンとか言ったか？」

「いやまあ、そりゃ知っとるわ。」

世界で一番有名な吸血鬼やもんなあ…。

皆も知っとるやろ…って、亜差霸蚊と夢路は知らなかったっけ？」

「もちのろんだぜ！」

「そのノリについていけない」

「えっ」

「はあ…まあ、一応俺から説明したるわ。」

あんぎゃーすとKは知ってるだろうし、緋水とせっちんは？」

「何故知っている事が前提なのか」

「いいじゃん知っていることは確かだし」

「まあ、知ってることは知ってるが…」

「いや、知ってますけど、そのあだ名どうにかなりませんか…？」

「うし、まあ簡単に説明しよか。」

真祖の吸血鬼は、所謂魔術だの魔法などで「自分から」吸血鬼になった奴の事をいうんや。

寿命は人間なんかと比べたら遥かに長いし、そもそもポテンシャルが違うから、普通にやったら人間なんか敵わんわな。

で、この嬢ちゃん…エヴァンジェリンは、その真祖の吸血鬼の一人や。他にいるかしらんけど。

600万\$の懸賞金をかけられた賞金首で、あだ名というか異名としては『闇の福音』『人形使い』『不死の魔法使い』『悪しき音信』『禍音の使徒』『童姿の闇の魔王』辺りが有名か？

今はこの麻帆良に呪いと結界で押し込められてるって聞いた事がある、確か『登校地獄』だったかな？学校に通わないと行けない呪い。まあ大雑把に説明したらこんなもんやな…二人ともどうしたし」

見ると、驚愕の表情を顔に貼付けた亜差霸蚊と夢路。

「マンゴーが説明キャラ…だと…」

「これは何かの夢ではないのか…？」

「しばいたるかお前ら！」

…仲良さそうで何よりである。

「まあ、とりあえずエヴァンジェリン自身の説明はこんなもんやろ。本人の前で説明することでも無いけどなあ」

「別にそれくらい構わん。概ね事実だからな。

あとは…そうだな、茶々丸の紹介もしておくか。

お前らにお茶を出したのが絡操 茶々丸。

私の従者兼メイドで、見ての通りのロボットだ」

「よろしくお願いいたします」

完璧な礼をとる茶々丸。

いつそ呆れるくらいに綺麗なお辞儀だった。

「結婚してください」

「何言うとんのや亜差霸蚊おい！」

「あかん、阿呆しかおらへん」

「そ、そんな亜差霸蚊様いきなりそんな…／／／」

「お前も何照れているんだこのボケロボっ！」

「ああ、いけませんいけませんっ…／＼／」

「…何と言うカオス」

「どうしてこうなったんですか？」

「恐らく気にしたら負け」

「これはひどい」

亜差霸蚊さんがいきなり茶々丸さんに求婚したり、それをマンガーが殴り倒して止めたり、夢路さんが呆れたり、残りのメンバーが溜息をついたり、茶々丸さんが照れたり、エヴァがネジを巻いたり、とまあ色々グダグダな感じで時は過ぎていった。

「さて色々話がズレたが、次はここに泊まる条件に移ろうか？」

「えっ、ただじゃねえの!？」

「そこは驚く所なのか!？」

「ケチー」

「何故そうなる!」

だんだんエヴァがツツコミキャラになっている件について。

「話が進まないから黙ってなって」

「…(´・ω・`) ショボーン」「」

「で、条件って?」

「何、簡単なことだ。私は吸血鬼だぞ？」

貴様らは潜在魔力が高そうだからな、これから麻帆良にいる間、一日一回私に血を飲ませろ。それがここに住む条件だ。簡単だろう?」

「…ぎゃー! 吸われるー!」「」

「真面目に聞かんか貴様らっ!」

…待て、なんか変な言葉が聞こえたんだけど。

「あの…エヴァンジェリンさん…？」

「む、確か清浦刹那、とか言ったか。どうかしたか？」

「あの…私達に魔力って…？」

「…む？なんだ、貴様ら自覚していなかったのか？」

「…」「…」「…ええええええつ！！！？」「…」「…」「…」

「う、五月蠅いぞ貴様ら！何故叫ぶ！？」

「い、いや、私達に魔力があるなんて欠片も知らなかったから…」

「それだけの魔力を持っているのか！？いや、確かに隠蔽されてはいたし、ジジイも魔法使いが来るとは言ってなかったが…」

「因みに魔力ってどれくらい？」

「正確な測定は難しいんだが…サウザンドマスターに一步劣る程度、といった所か？」

「…」「チートキターー！」「…」

「少しは黙ることをしないのか貴様らあ！」

エヴァが怒鳴るも効果無し。

まあテンションが上がるのはわかるが…

「そろそろいい加減自重しなさいよ」

「…」「ブゲラっ」「…」↑マンゴー亜差霸蚊夢路with三連ゲンコツ

「…はあ、まあ、魔力云々は置いとくと思いますか。これじゃあキリが無いし。

で、吸血はどういうことなの？」

「ふん、吸血鬼が血を求めて何か悪いか？

安心しろ、別に眷属にしたり操ったりする訳じゃあ無い。

今の体は魔力を殆ど封じられているからな、万が一の為に溜め込んでおきたいんだよ。

…ここだけの話だが、いい加減煩わしくなってきたからさっさとこの呪いを解きたい、というのが1番の理由だな。

術式が無茶苦茶なのが救いだな、魔力さえあれば破壊できそうなのだが…」

「…ふむ、まあここで断ったら宿無しになるし、受けるしか無さそうだね…。

わかった、その条件飲みましょう。

ただし、吸血は私だけにしていたきたい」

「……………えっ!?!……………」

…え、そんな驚くような事言っただろうか。

「こうすれば実質他の皆はただで泊まれる事になるし、そもそもこの交渉を勝手に進めたの私だし。

自分でやった事の責任は取らなきゃね」

「で、でも吸血まで一手に引き受けなくてもよかったんじゃない?…」

「いいのいいの、私がやりたくてやってるんだし。

エヴァはどう?私の血だけで満足できない?」

目を閉じて無言だったエヴァが口を開く。

「…ふむ、まあ私は構わん。男より女の血の方が格別に美味いからな。

お前みたいな女の血を毎日吸えるとなれば、クク、楽しみだよ」

「んじゃあ交渉成立でいいかな皆？」

私がエヴァに毎日吸血されるかわりに、寮に空き部屋が出来るまでここに住ませて貰うって事で」

「……異存無し！」……」

「なんでそんな所だけ息ピッタリなんですか！？」

「多分突っ込んだら負けだと思うよ刹那さん」

「刹那で良いですよKさん」

「じゃあ出来れば私も呼び捨てに……」

「よし、わかった。七人なら大部屋二つで足りるだろう？」

部屋をどういうグループで入るかはお前達に任せるとして……ああそうだ、料理等の家事もある程度手伝って貰うぞ。この人数になると茶々丸だけでは手が回らん」

「……おk把握」……」

「なんでお姉様までそっちに混ざるんですか？」

「さて、部屋に案内しようか、ついて来い」

「部屋割どうする？」

「男性陣で一部屋女性陣で一部屋に決まってるんだろJK」

「……もういいです」

「大丈夫だよ刹那、そのうち良いことあるから……」

「今日の夕飯は出してやる、明日からは色々手伝ってもらってからな。出来たら茶々丸が呼びに行くから、それまではのんびりしてるがいい」

「はいよー」

「ありがとなー」

これから数日の間世話になる部屋は、掃除の行き届いた綺麗な大部屋だった。

ベッドや机、椅子といったの家具は無いが、後で運びに来るらしいから問題無いだろう。

二人掛けソファーが各部屋に2つずつあったので、それを運んできて全員で座る。

「…ふう」

「何故賢者タイム」

「違うわ阿呆！」

「いいからとりあえず会議しませんか!？」

「あー…とりあえずマンゴーからかな。」

まずはあの交渉から、説明してもらおうか!」

gd gd な空気を払拭するべく、とりあえずマンゴーに話を振ってみる。

「あー…うんまあ、とりあえず勝手にやってすまんかった!

1番最初にタカミチが何の疑いもせずに学園長ん所に通したから、結構焦ってなあ…ちょっとは疑うかと思ったんやけどな、あれは予想外だった。うん。

まあそれは置いて…言うまでもないことやけど、ここは俺達がいた所とちゃう。何人かわかっているとと思うけど、ここはネギまの世界や。

あのぬらりひょんに利用されたりこき使われるのはお断り、でも知らない所に放り出されて金や住み家の当ても無い。今いる場所が場

所やから、稼ぐにしても難しい。ここは学園都市やからな。

せやったら、少し嘘をついてでも誰かに援助してもらわなきゃあかん。帰るアテも今ん所無いし。

幸いにも俺はこの事がある程度知ってるからなあ」

「「デデーン！なん…だと…」」

「もうお前ら黙つとれ！」

マンガーがどこから取り出した猿轡を亜差霸蚊さんと夢路さんにつける。

…いや待て、本当にどこから出した。

「でだ、こんな世界に飛んできたんやから、当然原作介入やろ！

こんなんまたとないチャンスやしな、神様が俺達にネギま世界で楽しんで来いって言ったんに違いないわ。

エヴァの話を信じれば、俺達にもかなりの魔力があるらしいしなあ。皆はネギまってどのくらい知つとる？」

「ちよつと詳しいって程度かな」↑K

「い、一応は…」↑刹那さん

「左に同じく」↑緋水さん

「そこそこ詳しいよ」↑私

「ならまあ問題無いやろ。

日付がわかってるからだいたいいつどんな時に何が起こるかもわかるし。

鋼翼学園特別クラスのモットーは！」

「「楽しい事が最優先！終わりよければ全て良し！」」

「とまあそういう訳や」

いつの間にか猿轡が外れていた亜差霸蚊さんと夢路さんが叫ぶ。

…いや、そんな自信満々に言われても。

「…はあー、この人達って…」

「…「楽しいことがジャステイス！」」

「ちよつとは自重しろっ！」

「…「だが断るっ！」」

「あ、あの、とりあえず話進めませんか…？」

お姉様の交渉の事も、聞きたいですし…」

と、刹那さんが話し掛けて来る。

「その呼び方は…いやもういいよお姉様で。別に嫌って訳じゃ無いし。」

で、さっきの交渉だっけ？簡単だよ。

まずマンゴーの言った通り私達には今の所住む場所が無い。

少しの間だけとはいえ、エヴァに衣食住のうちの食住の面倒を見てもらう以上、エヴァの条件を受けないという選択肢は初めから無いんだよ。

だったらそんな条件私が受けてやるさ。

別に死ぬ訳でも無いんだし、エヴァも私を気に入ってくれたっぽいしねえ」

…本当の所、ちよつとした下心があるんだけどね。まあそれは置いてどうか。

「で、でも、それだったらお姉様の代わりに私が…」

「ん、刹那さんストップ」

「むぐっ」

Kが刹那さんの口を押さえる。

「あんぎゃーすは無茶はしないし、するにしても必ず上手く行くてわかってる時しかないからね。

何だかんだ言っても心配しなくて大丈夫だよ」

「で、でも万が一…」

「その万が一があった時は、私達でどうにかしようじゃない」

ね？と笑顔で返され、刹那さんは渋々頷いた。

…や、心配かけて御免ね！。

「…まあ、私についてはそういう事で。

で、先程マンガーが言った通りここはネギま世界。

原作介入はするとして、問題はネギをどうするか…」

「というと？」

「ほら、だって原作だと薬味ハーレムになるじゃない。

主に私達が入ることになるクラスで。

皆ある程度好きなキャラとかいると思うけど、許容できるの？」

「「「お断りします（A A略）」」」

マンガー、亜差霸蚊さん、Kが口を揃える。

「他の人は？」

「ネギはどうでもいいかな、自由にやりたい」↑緋水さん

「同じく、ネギはどうでも…好きなキャラはいるけど」↑夢路さん

「ネギさんは嫌いですけど…その、好きなキャラとかは…特に…」
↑清浦さん

「ネギ嫌いが4人、どうでもいい人が2人。
ネギの嫌われように全私が泣いた」

「あれ、あんぎゃーすはネギ好き派？」

「まさか。大嫌いかな、そもそも子供自体あんまり好きじゃ無いし」

そこで唐突に緋水さんが。

「あのさ、ずっと突っ込まなかったけど…」

あんぎゃーすさんってそれが素なの？

最初の印象と全然違うから気になってたんだけどさ」

…ああ、まあ確かに不思議に思うだろーな…。

「こつちが素。ある程度気を許してる人間しかいなければ、自然とこうなる。」

多少の男嫌いがあってね、最初の方はよそよしくて悪かった」

「ああいや責めてる訳じゃ無いよ、ちょっと気になったただけだし。

それにしても…本当一気に印象変わるなあ。最初は普通の可愛い女の子に見えたけど、いきなり格好良い方向に行くからなあ」

「それに、ある程度気を許してくれてるってのも嬉しいかな。

お互いこれからも宜しくね」

緋水さんと夢路さんが口々に言う。

「ん、こちらこそ。」

あんぎゃーすって呼びにくいでしょう？

杏、^{あん}とでも呼んでくれればいいよ。呼び捨てでもいいし」

「…杏お姉様…」

だからお姉様はやめてって。

そう言おうとした時、部屋がノックされた。

「はいはい、どちら様ー？」

「茶々丸です。夕飯の準備が整いましたので、皆様を呼びに参りました」

扉が開くと、完璧なメイド姿で立つ茶々丸。

下からは良い匂いが漂って来る。

「ん、今から行くわ。ほな皆行くでー」

「「「いえーい！」」」

…このノリはなんなんだろうか。

「「「うおおおおー！！！」」」

「ん？来たか、ほら座って食べるといい。茶々丸の料理は美味いぞ？」

「それじゃあ遠慮無く…」

「いただきます！」

リビングに戻ってきた私達を出迎えたのは、豪華で無くともきらびやかな料理の数々であった。

「美味あっ！」

「お口にあったようで何よりです。皆様もどんどんお食べ下さい」

確かに美味しい。

少なくとも、そんじょそこらの家庭料理とはレベルが違っだろう。

「確かに美味しいなあ。茶々丸、今度私と一緒に料理作らない？」

「私もまだまだ未熟者の身、よければお願いします、あんぎゃーす様」

「あ、じゃあ私も混ぜてー」

「K様も、よろしくお願いします」

といった感じに食事はほのぼのと進んでいく。

「ああそうだお前達、ジジイとタカミチから家具が届いているぞ。外に置いてあるから、そっちで勝手に運んでおけ」

「はいよー。あのじいさん意外と気が利くなあ」

「変な勘違いでも起こしたんじゃないの？組織がどうかさ」

そこからの紆余曲折は省こう。

何があったのか今北産業と言われれば、

食事終了

家具運び

風呂入る

で終わるからだ。

風呂はかなり広かったので、男性組と女性組で別れて入った。

女性組に混じって入ったエヴァが、私達の身体を睨みつけていたのは気にしないでおこう。

貰った家具はベッドと小型の丸テーブルが二人で一つ分、椅子が人数分だった。

まあ数日の間だけだし、妥当な所だろう。

学生寮にはどちらも揃っているらしいしね。

服はパジャマと下着1着、翌日着る私服1着、麻帆良の制服4着（夏服と冬服2着ずつ）を人数分貰った。

翌日の朝にある程度お金を届けるそうなので、それを使って服や生活必需品を買ってこい、ということだろう。

明日は学生は午前中授業で午後は自由時間らしいので、私達は午前中に買物、午後にタカミチによる学校案内らしい。

まあ異存はない。着る服くらいは選びたい。

スカートとかあんまり着たくない。ヒラヒラした服ってそんなに好きじゃないんだよね。

…届けられた私服はワンピースだったけど。スカート長いからまだマシか。

明日はKと、ジーンズとシャツと上着と下着だけ買い揃えればいいか。

まだ肌寒いしなー。

…清浦さんも誘ってみようかな？

「あ、あの、杏お姉様…」

「…もういいや、お姉様で。一々訂正するのも面倒だし。どうしたの？」

「えっと、エヴァさんが自室に呼んでました。

それで私に呼びに行けって…」

回想してたら清浦さんに呼ばれた。

… ああ、吸血か。自分で決めたことだしね、行ってくるか。

「ん、ありがと刹那さん。Kー、んじゃ行ってくるよー」

「はいはい、先に寝てるよー」

心配そうにこつちを見てくる刹那さんに笑いながら手をふり、一階のリビングへと向かう。

「ん？来たか。ほら、私の部屋に來い」

リビングでは、眼鏡をかけたエヴァが読書中。

私が来た事に気づくと、本に筆を挟んで自分の部屋に入っていく。

後に続いてエヴァの部屋に入ると、シンプルだったリビングとは違い、ぬいぐるみや人形、可愛いクッション等が大量に置かれたファンシーな部屋だった。

「ほら、こつちのベッドに来て寝転がれ。心配しなくても、悪いようにはしない」

「… 何か、言い回しが不安んだけど」

「安心しろ、何度も言うが、血を吸うだけだ」

とりあえずベッドに寝転がる。

瞬時にエヴァが私に馬乗りになり、私の両腕を纏めて掴む。

… 動けない。

「何、暴れないようにするための処置だ。

暴れられて無駄な怪我をさせるのは避けたいからな」

「…私が暴れるようなことをする、って事だよな？」

「一応だ、一応。暴れなければそれでいいが、まあ無意識の内に暴れるだろうからな。」

そろそろ行くぞ？」

「行ってくてまた急な…ひゃん!？」

突然首筋を舐められる。

繰り返し繰り返し、丹念に舐られる。

鳥肌が立ち、無意識に脚と腕がピクン、ピクンと震える。

「うあつ…!? エヴァ、何を…ひう!」

「いきなり噛むと痛みが強くて血がますぐなるからな。こうした下準備がいるんだよ。」

お前が拒否しても続けるぞ、これは私の好みだからな。はむ…」

「くひいっ!？」

パジャマのボタンを外され、肩がさらけ出される。

舐めていた左肩をくわえられ、そのまま舐められる。

「んはあつ…! はつ、あくうつ…!」

「ふむ、まあこんなもんでいいか？」

「く、くわえたまま、っは、喋らないでっ、んうつ!？」

一度口を離れたエヴァに安堵するが、再度口を開いたエヴァの鋭く尖った犬歯を見て背筋が凍る。

「ほら、お待ちかねの吸血だ。何、痛くはしないから安心しろ」

「はっ…はあつ…っひ!？」

「…喋れんか。まあいい、では行くぞ？」

舐められただけで既に言うことを聞かない身体は、いまだに痙攣を繰り返している。

600年の研鑽は、こういう所でも発揮されているのだろうか。

「…今不穏な事を考えたな。まあ別に構わないが…かぷっ」
「………!!??」

頭がスパークし、視界がチカチカと光る。身体はガクガクと震え、まるで言うことを聞こうとしない。
成程、最初に言った「暴れないように」というのも頷ける。

「かつ……うあつ……」

「…予想以上に美味しいな、こいつの血は。
ふむ、この純度の魔力と血を味わえるとなると、クク、明日からも楽しみだな」

「あ、やばい。意識飛ぶ。」

そう思った瞬間、エヴァが口を離した。

「…ふう、御馳走様。お前の血は美味かったぞ？
自分の部屋に行く気力も無かるう、この部屋で寝ていけ」

既に言葉を返す余裕も無い私は、その言葉を最後に深い眠りに堕ちていった。

<Sideエヴァンジェリン>

ふう、堪能させてもらったよ。
流石に予想外だったな、この純度の魔力は。
美味そうな匂いはしていたから期待はしていたが、大当りか。

…ふむ、私好みに染めて、味わうのも一興か？

まあいい、そこはおいおい考えていくとしようか。

吸血鬼との邂逅。もしくは読者サービス。（後書き）

うん、これは酷い。

色々調子に乗った結果がこれだよ。

とりあえず、緋水さんが特にキヤラ違うと思う。あと夢路さんとか。あとクラスの標語を勝手に決めてしまった。

早速エヴァにフラグを立ててみる。最後は自重してない。する気も無い。一回でいいから吸血されてみたいんだよねー！エヴァー！私だー！吸血してくれー！

というかこのまま行くと私が百合ハーレムになる件。

さて、無茶振りですが次の人頑張れ！

次は緋水さん7月17日がんばる

エヴァさん家の日常パート1（次があるかは未定だよ？）（前書き）

今回は緋水さんだぁあ

どもども皆さんおこんばんちわ緋水です うん星は無いな。

まあ今回のキャラについては気にせずにしてください

それではどうぞー！

エヴァさん家の日常パート1（次があるかは未定だよ）

エヴァは目を覚ます。吸血鬼で夜型とはいえ、昼程度にはもちろん起きる。

居間の方では、いつもと違って少し騒がしい。何事か、と思うもすぐに辞める。

……そういえば、この家に新しい同居人がきたのだったか。上等な餌とも呼べる奴等にしては少しおかしい。

学生にしてサウザントマスターよりも少ない程度の魔力？それなのに魔法が使えない？バカバカしいにも程がある。

昨日の内にクソジジイ（学園長）へと連絡をとるも結局は素性は知らず。

だが、それは、自分にはどうでも良いのだ。何せ、先程も言ったが『上等な餌』なのだ。普通なら血を寄越せと言っても嫌がるのに、まるでそれが当然と言うようにその代価を受け入れた。

吸血鬼だと、『闇の副音』だと明かしても、恐がる仕草も……全くと言って無かった。

こんな対応をされたのは、タカミチやサウザントマスター以来かもしれない……それがどれだけ大切な物か。それはきつとエヴァ本人しかわからない

真面目な感じはここまでで終りだよー

さて、エヴァが支度を終えて。

居間へと向かうと昨日来た居候達が各自のんびりしていた。

テーブルの上に乗っかるマンゴープリン。

「さて、それじゃこいつらで全攻撃！」

「ちよ、まっ、その覚醒獣はむりぽお！？」

そのとなりでメガネをかけた少年……確か緋水ともう一人は亜差霸蚊が某能力・コスト・戦闘力が天元突破しているカードゲームで遊び。

「杏お姉さま、あゝん」

「ちよ、ちよっと！止めなさいってば！？」

ソファの方では……言葉では良い表せない、少女同士の甘い空間が繰り広げられている、とだけ言っておこう。

そして最後の……雪乃というこれまた眼鏡少年とKと呼ばれた少女がソファの方を見ないように無糖のコーヒーを飲んでいた。……あの空間、甘過ぎるしな。

思わずため息をついてしまった。

「ちくしょー！いきなりルールがわからないカードゲームやらせる

なよ！というか酷くウザイデッキでしたが」「はッはッは、これでも前居た学校の友人たちには『お前無駄にウザイデッキ作るなよ。』とまで言わせた訳じゃ……あ、エヴァ……ンジェリンさん、おはようございます」

「ん。というかエヴァでいい……それよりも、何だこの部屋は。いや、好きにしてもいいと言ったのは私だが……せめてプリンは皿に乗せる」

そついうと、皆が疑問符を浮かべて机を見る。

「……ああ、マンゴーか、おいマンゴー、そろそろ戻れよ。じゃないと、誰かに食われるぞ？」

ぶるるん。誰も動かしていないのにそのプリンが動き。ぶるんと最後に震えたかと思ったら、人に変わった。

「な！？なななな」

「食われるんはいややな……ってエヴァっちどうしたん？」

「エヴァっち呼ぶな！というかお前人間じゃないのか！？それとも魔法か？！」

「いや、ちゃうねん。俺、人間兼マンゴープリンやから」

意味がわからない。

頭をかかえてるにも関わらず、他の奴等は傾くだけ。

訳がわからないよ！

どこかで白い契約社員もといQBが叫んだ気がするがきつと気のせいだろう。

「……皆様、食事の準備が出来ました。」

「おっ！茶々丸さんの飯ってうまいからさっさといこうで〜！」

「そうだな。行こう……って刹那！そろそろ離れる！」

「いーやーでーすー！」

「……ごめん、コーヒーおかわり頼みます、茶々丸さん」

「かしこまりました」「オーケイ私も付き合っわ」

「わかりましたコーヒーがお二つですね？」「俺達も行くか？」

「だな……あ、カード渡してくれ。俺が持つとくよ。」

「ん。わかった」

誰がどの会話か創造に任せよう。代々わかるだろうし。

「さて、エヴァさんも行きましようよ」

「あ、ああ……って待て。緋水、お前何故私から目をそらす。」

「あー、その服装がですね……。」

そう言われて、エヴァは服装を見る。

自分では至って普通と思っているその服装。

何時もは黒い制服のようなふくそうなのだが、休みの日ということもあり、もはやそれ、下着じゃね？と言うような服装だ。

しかもエヴァの肌は雪のように白く、黒い服装がまたはえる……要

は、うぶな少年には刺激が強いわけで。

「ふふん、私の美貌に心奪われたか？ん？」「あねー、や、止めてくれませんかね……。」

ぐいぐいと迫るエヴァにジリジリと逃げる緋水。頬が少し赤いのはご愛嬌だろう。

「Σ緋水！？お前何て羨ましい事を！！俺と代われ！！！」

それに気付いた亜差霸蚊が騒ぎだし

「というか誰か助けて！」

「いや、実は楽しんでるだろ緋水」

ニヤニヤと笑い外野に徹する雪乃。

「楽しんでねえよ！！！」

「ん？おもしろいことやってんなー……緋水が逃げるに500円」

「いや、これ賭けにすらならないでしょ……だってほら」

ゴンツツツ！！！！×3

Kが指を指した瞬間。

重く痛そうな音がして、エヴァ、緋水、亜差霸蚊の三人が頭を押さえてうずくまる。

それをやった本人……あんぎゃーすは握りこぶしを作り怒りマークを額に浮かべながら微笑していた。

「つゝゝゝ！って何で俺まで！？俺、どちらかと言うと被害者！」

「あんたが最初からそんな反応しなきゃ良いのよ。」

「理不尽な！？」

「……キ、キサマ……飯にも吸血鬼の私にげんこつとは……良い度胸だ（ゴンッ！）つゝゝゝ！」

「……反省した？」

「く……おぼえてるよ（ゴンッ！）つゝゝゝ！」

「容赦ねえ……。」

「あれ、もしかしたらこの中で一番強いのも……。」

「……それ以上は言わない方が良いと思うよ。」

外野に徹していた三人も、流石にエヴァの様子を見て少し同情していた。

さて、昼食が終わり何でか皆でゲームをやることになった。

事の始まりは暇を持て余したマンゴープリンの何気ない一言と、緋水ね応答だった。

『あれ、ここにW。iないんか？』

『あ、俺持つてるよ？ス。ブラでもやる？』

この言葉に反応したのは、家主のエヴァ。

『ス。ブラ？何だそれ』

ここでいち早く気付いたのはあんぎゃーす。ココは、自分達の場所ではない。

ちなみに時間軸も少しかりおかしい。

自分達は2011年だったが、こっちはまだ2003年。

いや確かその時に出ていたがW。iはない。

ちなみにだが、緋水達がやっていたカードゲームや、スマブ。の参加作品はあったのだが。

慌てていたあんぎゃーすが、他に気付いた人物の口八丁によって丸め込み、エヴァ家と鋼翼学園の混合勝ち抜き戦が始まった。

ちなみにルールは早期決着のため、限界ギリギリ300%である

「く、えい、そこだ…… ってまずい吹っ飛んだ!？」

「アハハハ! 駒の威力はなにげに強いんやで! ? って駒持つてくなし!」

「フウハハハ! あばよとつつあゝん!」

「貯めてためて…… どん」

「「あ」」

最初はエヴァ、マンゴープリン、亜差霸蚊、K。

エヴァは某ピンクボールを使っていたがマンゴープリンの使う某口ボットの駒を避けきれずに画面外へ飛び復帰の最中。

しかしその駒は亜差霸蚊の使う某DKに奪われDKが逃げる。

その二人目掛けて某黄色の電気ネズミがチャージを終え突撃を加える。

見事二人に激突。二人が吹き飛んだ所には、復帰中のピンクボール。

「お、お前等吹っ飛んでくるなー!？」

「む、無理言うな〜!？」

「あ、むりだ」

という訳で勝者K

次はNPCを含めた、チャチャゼロ、刹那、それにあんぎゃーす。
ちなみにNPCを入れた理由だが最後が二人になってしまっからである。

「ケケケ、切り刻ンデヤルゼ」

「ところがぎつちゅん!」

某緑色の服を着た剣士ソードマンを操るチャチャゼロとあんぎゃーす操る青い波動使いの某ポケモンが迎え撃つ。

「さあ、一緒に落ちましょう!杏お姉さまの為に!」

ちなみにNPCは某土管工の永遠のライバルに道連れにされて死亡していた。

「あ、あれ!？私の描写があんまりない!？」

そこはあれです。作者の腕が(ry

そして第三戦。これまたNPCに、緋水、茶々丸、雪乃の三人

「……ていつ」

「あ、ちょ、その大根は駄目え!？」

茶々丸操る、某桃色のお姫様が投げた大根を間一髪で避ける、雪乃の薄っぺらい黒色。

その大根は後ろから迫っていたNPCにぶつかりNPCは彼方へと消えた。

「なら……!」

「ちっ!」

桃色のお姫様が追撃のために近接する。

それを上スマッシュで回避、すぐさま地面へともどり、迎撃に入る。

「これでっ!」

左スマッシュ。この二次元の黒色の左スマッシュはランダムに火力が変わる。

よけきれなかった桃色にその攻撃が当たる。数字は「8」一番上から二番目の火力である。

「この時を、待っていた!!」

「ッ!？」

突如、黒色のいた地点にいかにもなロケット砲が迫る。ギリギリでそれを回避、画面の端を見る。

そこには某工作兵を操る緋水。

「今まで見なかったと思ったらそこかよ!？」

「なに、良い感じに同士討ちをしてくれて助かったよ……お礼だ、

受け取ってくれたまえ」

黒い笑みを浮かべる。そのまま、またしてもロケット砲を放つ。
しかし、動きが遅いため走って近接する。

そして二次元黒色が地面へと降り立った刹那、爆発する

そう、蛇の工作兵お得意のトラップである。

「残念だったねえ！！（某胡散臭い男風に）」「何つー面倒なモンを！？」

しかし、たまたま出っ張りに引っかかったため、何とか復帰に成功する。

「ちつ、運のいい！なら追撃するまでよ！」

今度は迫撃砲を構え、それを打ち出す。

それをなんなく回避、しかし見れば先ほどまでいた工作兵がいない。
どこだ……上！

気付くも画面外から出てくる工作兵。

「基本格闘はCQC！」

「うあっ！？」

今度こそ黒いペラペラが画面外えと消える。勝者、緋水

「ふむ、恐縮だが、勝たせてもらったよ……ククク」

「……………うわぁ……………」

ちなみに今までの彼と違った黒緋水を見て、殆どの人が冷や汗を書いていた。

さてこれで三回戦が終了したのだが勝ち上がったのはK、あんぎゃーす、緋水の三人。まだ、もう一人の枠がある。

という訳で敗者復活戦。

といきたいのだが作者の気力が無くなって来たため少々略させてもらう

第一試合。

雪乃、エヴァ、茶々丸

エヴァが何かを見いだしたのか、某野球バットの代わりに木の棒を使う念力少年を使用し圧勝。

第二試合

チャチャゼロ、刹那、亜差霸蚊。

亜差霸蚊の自滅により実質的にチャチャゼロと刹那の一騎討ちに。最後は刹那の操る小さい電気ネズミの雷にあたり刹那の勝利。

そして第三試合。

一対一の真剣勝負。

雪乃対マンゴープリン。

雪乃が某天使的な何かを使用し善戦するも、某一等身の騎士の一撃をまともに受け、轟沈。勝者はマンゴープリンとなった。

敗者復活、決勝戦。

エヴァ、マンゴープリン、刹那の三人で行われたこの試合は文字通り、一瞬でケリがついた。

「なん……やて」

「く、油断した……」「フフフフ……フハハハ……ハアーツハツハ！見たか、これが吸血鬼の力だ！」

吸血鬼の力が関係あるのかはともかくとして、勝ち上がったのはエヴァ。使用したのはもちろん念力少年。

最初の試合に危機感を感じた二人が同時にエヴァへと仕掛けた。

しかし念力少年の上Aスマッシュが二人を同時にとらえ全く復帰も出来ずに空の彼方へと消え去った。

実は、この念力少年、この攻撃がいろいろとおかしいのである。

他の攻撃は一応復帰が可能であるが、この攻撃をまともに食らうと高確率で吹っ飛ぶ。かなり強い勢いで。

という訳で決勝戦。

一人目。電気ネズミから某天使的な奴に乗り換えた（？）K

二人目。青い波動使いのままのあんぎゃーす。

何でか知らないがとても似合う気がするのは俺だけだろうか？（by 作者）

そして三人目

未だ何処か黒い笑みを浮かべる緋水。使用キャラは先ほど同じ工

作兵である。

そして最後。

先ほどの戦いで絶賛絶好調中のエヴァ。使用キャラは同じく念力少年。

ちなみに、茶々丸はここで退出した。理由は夕食の時間が迫っているからである。

「さて、ここでルール変更や」

「……は？」

突如一番最初にやろうと言いだした男、マンゴープリンが良い放つ。

「いやな、折角の決勝戦やしちよいとおもろくしようか思つてな」

「ほう？良いだろう……どうかえるんだ？」 「あら？エヴァっち余
裕やな？」

「フフフ……どんなルールだろうが私の操る。ユカが負ける訳が無い！」

自身満々に（ない）胸をはり、えばるエヴァ。

「……ふむ、具体的にどう変えるのか……恐縮だが教えて貰えないかな?」

「そろそろ緋水戻って来てよ!？」

「あ、ごめんごめん。たまにこうなっちゃうんだよね」

ようやく某バイオなショツクのキャラから戻る緋水。

「でも、私も知りたいかな。どうするの?」「いや、ただ、これをこうして、ポチっと……これでよし」

皆が疑問を抱くなか。見えないように少しだけ設定を弄るマンゴープリン。

「さ、これで終わりつと。続けよか？」

「ちょ、せめて何を弄ったか教えてよ」

しかしスルーされ、ゲーム開始のカウントダウンが始まる。仕方なしにため息をついてコントローラーを握るK。

ゲームが始まる。

最初はKと緋水が様子見、エヴァとあんぎゃーすがじりじりと距離をはかる。

その時、Kの近くに一つのカプセルが落ちる。

「あれ？設定変えたのってアイテム？」

「そや、だいぶ面白くなるで？」

マンゴープリンがかえたのはアイテムの設定。

今まではアイテムはすべて使用しないようにしていたのだが……

ともかく、それを地面に投げつけてアイテムを取る。

中から出てきたのは……某赤い配管工の敵キャラ、歩く爆発である。

「ボ○兵!？」

「その他爆発物もあるで。」

「ちょ、ソレはヤバイつて」

そう、マンゴープリンが入れたのは、爆発系、それとあるアイテムである。

しかも、アイテムの出現量は一番多い設定である。
つまり、どういう事かと言つと。

「誰だ地雷仕掛けたのは!？」

「わたしです」

「緋水キサマアアア!？」

とか、

「ボ。兵いやあ!？」

と導火線に火がついた歩く爆弾から逃げ回ったりとか、こんな感じである。

そんなとき、緋水の近くに木箱が落ち、壊れる。

中から現れたのは、ボ。兵×4。一つの木箱から現れる限界数である。

またしても黒い笑みを浮かべる緋水

「恐縮だが、使わせてもらおうか」

そう良いながらボ。兵やら更に出てきたセンサーマイン何かをドン
ドン投げる緋水。

「ちょ、無理、きゃっ!？」

一番最初の脱落者はK。いや、ボ。兵4連発は中々きついだろう。
仕方ない。

「ちい、アイツが邪魔だな……先に狩る!」 「エヴァ、私も手伝うよ!」

「Σ2対1!?!」

迎撃にでも、いつの間にか貯めていたと思われるあんぎゃーすの波動攻撃により吹っ飛んだ緋水。

これにより、エヴァとあんぎゃーすの一騎討ち……かと思われた。

「ん?画面が暗く……」

「え、これってまさか……」

画面端、先ほど緋水が吹き飛んだあたりに、虹色の玉が出現する。名称、スマッシュボール。各キャラの必殺技が使えるようになるアイテムである

そして、ちょうどそこに復帰を果たした工作兵が舞い降りる。

「……ヤバイなエヴァ、あいつを止めないと!」

「ど、どういう事だ!?!」

すぐさまエヴァを無視し走り出すル。リオ、しかし無情にもスマッシュボールを割ったのはやっぱり工作兵。虹色のオーラを纏っているのはどこかシユールだ。

「恐縮だが……討たせて貰うよ」

「ス、スネークツツ!?!」

『ショータイムだ!!』

某蛇の工作兵の掛け声とために、十数秒の悪夢の弾幕ショーが幕を開けた。

「く、くそ！あれ卑怯だろう!？」

「うつ……途中まではよけたんだけどなあ……ボ。兵が……!」

最後に残っていたのは、必殺技を決めた工作兵であった。

エヴァはいきなり画面半分をおおった工作兵の体に遮られ避けることも出来ずにグレネードがぶち当たり即落ち。

あんぎゃーすはぎりぎりまでよけたのだが、導火線に火がついて走り始めたボ。兵に気が付かず自滅。

勝者は緋水となった。しかし、その緋水はというと。

「そろそろ戻れやつ!」

「パパス!？」

「次はおれだつ!」

「あべし!」

「次は私!」

「ひでぶ!？」

黒化状態が戻らなかったなので、強制的に（肉体的に）修正中である。

「くそ、次はまけないからなあんぎゃーす!」

「ふふん、負けないよ?」

何だかんだで、仲良くなった二人であった。

「ケケケ、ゴ主人、久々ニ楽シソウニ笑ッテヤガルゼ」

「ああ、マスターがあんなに楽しそうに……（じーっ）」

エヴァさん家の日常パート1（次があるかは未定だよ？）（後書き）

今回の主人公はエヴァさんとあんぎゃーすさんと工作兵です

決して緋水では無いのであしからず。

ちなみに仲良くなったとしてもエヴァさんとあんぎゃーすさんは搾取るものとされるもののままです。

さて、実際書いてみてなにこのグダグダと思った訳なんですが。

……原作前の日常編、俺の苦手な所何ですよ。

実際兄貴にも少し手伝って貰いましたし。あ、兄もこのなるうのなかの作者のどこかにいますよ？

さて、それでは……まず刹那さん、あんぎゃーすさん、本当に申し訳ありません。

何でか前回や前々回の話の流れ的に、貴女達の絡みがこんな感じになっちゃいました。申し訳ありません。

しかしマンガープリンさんは使いやすいですね。

主にネタ的な意味で。それに比べて俺自身が使いづらい使いづらい

……

それにしても、それ以外の方のキャラってこんな感じでよかったんですかね？よく分からない……

それと、俺の設定にあった「ナチュラルに人の神経を逆撫でする」ってというのは、大体作中使った口調のせいですね。

いやあ恐るべきはバイオなショックの1に出てきた口。ート・ライ
。ンですね。

まあ良く使うネタは某じまんぐに。バート・。イアンです。次に俺
を書く場合は参考にしてください。

次の作者さんはKさんです。きっとおれより見やすいと思うので、
こっご期待と言わせて貰います（とプレッシャーをかけてみる）

B y 緋水

Kさんへゝ

次の✕切り7月20日だよゝ

転入マダー？（A A略）（前書き）

今回はくKさん

殴られる覚悟は出来ているっ！

視点と展開の都合上、マンガーさん夢路さん亜差霸蚊さん緋水さんの出番が短いです。
申し訳ない。

転入マダー？（A A 略）

<Side 合法口りな吸血鬼>

「…何か失礼な言葉を言われた気がする」

「マスター？」

「エヴァちんどしたー？」

「いや、なんでもない。その呼び名をやめろ」

こいつらがここへ来てから既に四日目。

この五月蠅い雰囲気にもすっかり慣れ、今は全員集まっただけの夕食時である。

「む、これは美味しいな。腕を上げたか？茶々丸」

「ああいえ、それは…」

「ああ、今日は私が茶々丸と一緒に夕飯作っただよ。さ、皆遠慮せずにどうぞー」

「杏お姉様の、手料理…！」

「おおー、杏の手料理ってなんか久しぶりだねー」

「まてKさん、それはつまり何度も杏さんの料理を味わった事があるという事か」

「羨ましい！心の底から羨ましい！」

「いや、今から皆も食べるんだし…ほら、料理冷めちゃうよ？」

今回の料理は中華、時間が経てば経つほどにまずくなる。冷めると聞いて、慌てて全員が手を合わせる。

「……………いただきます!」……………
「はい、召し上げねー」

皆、次々に料理を口にしてい。く。
かくいう私もとりあえず口に運ぶ。

「……………美味あつ!!?」……………
「ありがとねー」

周りが一気に叫んだ。
私も声こそ出さなかったが、これは美味しいと感じた。
中華は作るのが難しいと聞いていたのだが…正直にこれは凄いと思う。

「どうエヴァ、美味しい?」
「ああ、正直少し驚いた。こんなに美味しいとは…」
「それは良かった。また作るよ?」
「ああ、頼む」

騒がしいままに、夕食の時間が過ぎていった。

「ふう、さっぱりした!」

「おう、女子組もあがったかー」

食事が終わればすぐに風呂。
時間を有効活用するためにも、風呂とかは入れる時にさっさと入る

ようにしている。

でないと遅くになってから面倒になって入らずに寝てしまうような輩もいるらしいからな。

実際にいるかどうかは知らんが。

「…何をやっているんだ？」

見れば、何処からか持ち出してきた雀卓と麻雀牌を並べているマンガー達。

いやまて本当に何処から出した。

「これでしょうか？姉が倉庫から見つけてきたのです」

「ケケケ、ゴ主人相手シテヤレヨ。コイツラ結構ヤルゼ？」

「いやチャチャゼロも強いわ。積み込んでるかと思っただわ」

「スルカソンナコト！」

…麻雀か。

「ふむ、まあ私はいつこうに構わんが…メンバーはどうするんだ？誰かやるか？」

「じゃあ俺が！」

「じゃあ俺が！」

「じゃあ俺が！」

「…どうぞどうぞ」

「ですよー」

一人目、夢路雪乃。

「杏行けば？どうせ勝つでしょ？」

「えー…手扱いちゃ駄目かな…？」

「駄目。折角だから見せつけてきなよ」

「杏お姉様、頑張ってください！」

二人目、杏。

「ケケケ、ジャア残り二人ハ俺トゴ主人ダナ」

「ふん、お前達とは年期が違うんだ、華麗に勝って見せようじゃ無いか？」

三人目、チャチャゼロ。

四人目、エヴァ。

一部の皆様ならばこう叫ぶだろう。

「エヴァ逃げて、超逃げて」と。

だがしかし、そんな読者様の声は届かないのであった。

東一局 親・杏

三巡目

「リーチ」

「三巡目に親リー！？」

「なんだそれは！」

四巡目

「あ、ツモ」

「…何イ！？」「」

「立直一発ツモ、タンピン三色ドラ裏。 9 翻だから倍満、 80000 オールです」

「初っ端から重いなあ……」

「ケケケ、シカモ連荘カヨ……！」

「ふん、次は絶対にあがってやるからな……！」

「お、お姉様って運が良いんですね……」

「本当だよな。ちよつと分けてくれないかなあ。さあ、オーラスの一本場だ」

「……えっ？」「……」

東一局 一本場 親・杏

一巡目

「ダブリー」

「はあっ！？」「」

「マジカヨ」

三巡目

「カン。もうひとつカン。ツモ。ダブリーリンシャンツモ三暗刻ドラ4裏8。数え役満は16000オール」

「咲かお前はっ！」

「……アリエネエダロ」

「次だ、次で挽回できれば！」

「……ドラ12なんて、初めて見ました」

「私や私の友人、杏の友人でやる時には割と日常茶飯事だったりする。杏、確か一回だけドラ24枚乗せてたよ」

「……どうということなの……」

「だから杏とまともに普通の半荘勝負するなら、杏以外の持ち点10倍にして、杏だけ役満縛りくらいにしないと勝てないよ。そんなハンデつけても負けるのはよくある話だけだね」

「……」「……」「……」

「それ、もうオーラスだ」

東一局 三本場 親・杏

「あ、天和四暗刻大三元」

「……………」

「……流石二笑エネエヨ」

そんな感じで、私の久しぶりの麻雀は終わった。

……打った気がしないが。

……そのあと、杏以外の奴らとも打ってみた。

勝率（TOP率）は4割ちよつと、良くもなくい方だろう。

……杏の勝率は100%だったが。

あいつの麻雀は運という言葉で表せない。

なんだ、トリプル役満つて。初めて見たぞそんなの。

そもそも、あいつの「運」はどこかおかしい。

私のクラスにも、椎名桜子という運の良い奴はいる。

だがそれも日常にちよつと作用する程度、人からは「なんだかあの子運が良いな」くらいにしか思われないだろう。

しかし、杏は別だ。

あれは「運」じゃない、といっても良いくらいだ。

あそこまで運が良いと、もはや「呪い」の域に達しているのでは無いかと思う。

持つべくして持って産まれた豪運。

全く、一人の人間が持つには過ぎたものだな。

「そうは思わないか？杏よ」

「くう…っ！あっ、ん、ひああああ…っ！」

私のベッドの上で、髪を振り乱しながら喘ぐ杏。

固く閉じられた目の端には涙が浮かび、必死で私の拘束から抜け出そうともがいている。

しかしいくら身体が本来の力を発揮できないといっても、この身は吸血鬼。

ただの人間である杏に、解ける要素は無い。

吸血によって、少しずつではあるが魔力も回復しているしな。

「くく、御馳走様、だ。今宵もお前の血は美味かったぞ？
またこの部屋で寝ていくといい」

「はあっ…はあっ…ふあ…」

急に眠気が出てきたのか、欠伸を噛み殺す杏。

当然だろう、とどのつまり貧血になっている訳だからな。

吸血初日はすぐに眠ってしまったが、二日目からは少しぼうつとしたあとに眠っている。

人間の慣れとは恐ろしいものだ。

一度たりとも経験したことが無くても、この順応性の早さだからな。

「ん…」

…とりあえず、寝る時に私を抱きしめて離さないのはなんとかならんのか。

こいつ、寝る時に何かを抱きしめて寝る癖でも持っているのか、寝る前に私をベッドに引きずり込んで来る。

別に嫌って訳ではないんだが、この歳になってこれはなあ…。
…まあまだ寒い時期だしな。構わんか。

翌朝、珍しく朝早い時間に目覚めた私はベッドに杏がいないことに気がついた。

「…茶々丸と一緒に料理か？熱心なことだ」

厨房からかすかに鳴る音で、杏がいない理由を察知する。

とりあえず起きるかと身体を起こした所で、机の傍に置かれた指輪が光り始めた。

『…爺か、何の用だ？』

『ほ、起きておったかエヴァンジェリン。朝早くからすまぬのう』
『そんなことはいい、とつとと用件を言え』

これは爺が私と通信するための通信端末。

ようするに仕事用だ。

『相変わらず手厳しいのお…彼等を学園に入れる準備が整ったというのと、寮の都合が出来たんじゃよ。』

朝食が終わってからでいいから、校長室に来てほしいと伝えてくれるかのお？』

『わかった、伝えておこう。他には？』

『えーっと…今のところは特に無いのお』
『なら切るぞ』

ブツッ、と音をたてて通信が切れる。

「という訳だ。案内は茶々丸にさせるから、朝食食べたらずく早く行け」

「『『おk把握』』」

…相変わらずこいつらのテンションはよくわからん。

今日の朝食はご飯、味噌汁、卵焼き（ちよつと甘め）、焼鮭といった、まるで絵に書いたような純日本食であった。

勿論味はいい。

茶々丸に勝るとも及ばない。

「あ、卵焼き取ったな亜差霸蚊こら！」

「ふひひ、頂いたもん勝ちだぁー！」

「そして卵焼きを食べ終わった俺は横の亜差霸蚊の皿から卵焼きをかつさらうのでした」

「貴様あ！？」

「はい杏お姉様、あーん」

「ほら杏、こっちも。あーん」

「そんな朝から食べられないって！自分のは自分で食べてってば！」

「…全く。騒がしくて、無秩序で、それでいて明るくて」

…私に無いものを、持っている。

「ではマスター、行つてまいります」

「行つてくるでー、エヴァちゃん」

「その呼び名をやめんかつ！」

出ていくときまで騒々しかった。

全く、あいつらときたら…

そうして、扉が閉まつた時。

不意に、家の中が広くなつたように感じた。

私と、茶々丸と、チャチャゼロと、あいつら。

十人では少し手狭だと思っていたこの空間が、15年住み続けたはずの私の家が、今はとても広く感じる。

そして、気づいた。

たった数日。されど数日。しかし…

「楽しかった、な」

口に出せば、すんと、とその言葉は胸の中に落ちてきた。

存外、私はあいつらのことを気に入っていたらしい。

じゃなければ…こんな感情、抱く訳が無い。

<Side K>

さて、あの学園長に呼び出されたけど…

部屋の都合がついたって本当かな？

「というか、本当にそんな簡単に部屋って空くのかなあ？」

「とりあえず、行ってみないとわかりませんよね…」

「まあ、特に問題は無いと思うけど」

「へ？何で？」

「まあ何かあってもなんとかなる、ってことだよ。

何も無いのが一番だけだね」

「ほっほっほ、よく来たのう。まあ、折角だからソファにでも座りなさい。しずな君、お茶を入れてくれんかの？」

「わかりました」

「では、私はここで失礼いたします」

「おお、茶々丸君。エヴァンジェリンによろしく伝えておいてくれ」

「じゃあな茶々丸。またな」

「はい、皆様方もお元気で」

ボタン、と扉が閉まる。

「さて、急に呼び付けて悪かったのう。

まず、3〜4部屋を取るのは流石に無理じゃった。

人数的にギリギリでのう…

でじゃ。取れたのは二人部屋二つなんじゃが…。

実はこの寮、二人部屋にも関わらず一人で住んでいる子が四人いてのお。

えーっと、あんぎゃーす君とK君、それに清浦君。もしよければでいいんじゃないが、その子達と相部屋になつてくれないかのお？

ああ勿論、許可は取つてあるから心配し無くていいぞ？」

「…はあ…」

「そういえば、タカミチ君の案内で授業を見たことがあるんじゃないかな。これが名簿。で、今一人部屋なのはこの子らじゃのう」

名簿内の写真を指差す学園長。

その生徒は…。

・長谷川千雨

・古菲

・ザジ・レイニーデイ

・朝倉和美

…んー、なるほど。確かに原作だと、ルームメイトが確定してない人ばかりだ。

「全員ルームメイトに関しては構わないそうじゃ。

後で会う機会を設けるから、その時にでも各自お願いするといいじやろう。

それから男子諸君は二人部屋二つで固定なのじゃが、それはまあ了承してほしいの」

「いや、それくらいわかってますって」

「年頃の女子な訳やしなあ」

「話が早くて助かるぞい。

今タカミチ君に呼びに行かせているからの、もう少し座って待っていておくれ」

途端に騒ぎ出すマンゴー達と、杏に擦り寄る刹那さん。

因みに今日は日曜日、学校はお休みである。

「んー、お姉様…」

「また飽きもせずくつついて…嫌って訳じゃあ無いんだけど、なんかどうしてもなあ…」

「まあまあ、刹那さんも杏に懐いている訳だし、嫌じゃ無いならそのままにしておこうよ」

…刹那さんの気持ちも、わかるしね。私も同じ気持ちな訳だし。全く罪作りの人だよ、杏は。

「（コンコン）学園長？僕です、タカミチです」

「おお、タカミチ君。よいぞ、入ってきてくれ」

しばらく待っていると校長室のドアがノックされ、四人の女生徒が入ってきた。

「失礼します」

「お邪魔しますよー！」

「お邪魔するネ」

「……」

ザジ、何か喋れ。

「よくきてくれたのお。こちら7人、明後日くらいに転入手続きを終えてクラスメイトになる子達じゃ。

一気に7人もクラスメイトが増えるとなると少し緊張するかもしれないが、まあそのへんはよろしく頼むのお。

でじゃ、今の所女子生徒となるこっちの3人は空き部屋が無くてのお。二人部屋であるが一人で住んでいる君達には、ルームメイトになつてほしいのじゃ。勿論強制ではないがの。

色々話してみて、もし話が決まったら言っておくれ。

さあ、自己紹介を」

とりあえず私と杏と刹那さんの三人が立ち上がる。

「初めまして、Kです。こっちに來たばかりだからまだ空氣に慣れないかもしれないけど、これからよろしく」

「あんぎゃーすです」

「清浦刹那…です」

「…もうちよつと喋ろつよ、杏も刹那さんもさあ」

「私は古菲ネ！おんなじクラスメイトとして、ヨロシク！」

「私は朝倉和美。報道部所属なんだけど、早速取材を……ザジ」
…ぬう」

快活な笑顔で挨拶した古菲。

どこかからペンとメモ帳を取り出した朝倉を遮って名乗るザジ。
朝倉はどこと無く不満そうである。

「…長谷川千雨、です」

（ちよつとだけ）学園長を睨みながら自己紹介した千雨。

まあ大方、「また麻帆良で非常識な事が起こった」という感じの事を考えているのだろう。

「…それにしても学園長、うちって女子中学ですよ？何で男子がクラスに入ることになってるんですか？
それにそれだけなら…まあ千歩くらい譲っていいにしても、なんで男子が女子寮に入るんですか？」

あ、口に出した。まあそりや不思議に思うよねえ。

「ほっほ、何も難しいことじゃあないぞい。

この度麻帆良の女子校一つと男子校一つを纏めて一つの共学校にする予定があつてのう。

今回はまあその試験的なものじゃの」

「はあ……」

…今の千雨の心を代弁すると、「いやいやおかしいだろ、試験的要素っていったって何でこっちでやんだよその共学校になる予定の所でやるとか考えなかったのかよそもそもこいつらも名前とかツッコ

「三所多すぎだろなんだよあんぎゃーすとかKとか馬鹿にしてんのかよ」

「といった所だろうか。」

「…むう、いいなあ。」

「私、千雨ちゃんと相部屋がいいなあ。何だか楽しそうだし」
「はあっ!？」

何故か千雨が驚いたようにこちらを見遣る。

「え、駄目かな千雨ちゃん？何だか楽しそうじゃない？」
「い、いやいい！私は一人部屋がいいんだって！それとちゃん付けやめろ！」

「とはいっても…こうして新しい入居者がいる以上、誰かと相部屋になってもらわないと困るのじゃよ。
流石に駄々をこねられてものう…」

「だ、だったら他の奴にでも…」

「自分が嫌だからといって、そんな自分勝手は流石に許されんのう」

（そうじゃなくてこんな胡散臭い奴らといきなり一緒に住むっていう非常識が嫌なんだよ、それぐらいわかれよこのジジイ！）

…そんな心の声が聞こえそうである。

「大体、相部屋に関しては了解していたからのぉ。
何事もいい経験になると思うがの？」

（そんな経験欲しくもないっての…!）

「あっはっは、まあいいじゃない」

「良くねえよ！くそつ、何でこんな事に！いいいいよわかったよ！相部屋にすりゃいいんだろ！」

「千雨ちゃんありがとねー」

「だからちゃん付けやめろって言ってるんだろ！」

うん、やっぱりこの子とは仲良くなれそうだなあ。

その後、どうしても杏から離れようとしないう清浦さんに困った杏と学園長。妥協案として、杏と刹那さんはエヴァの家に泊まること決定。

古菲は「自分が床で寝るから自分の部屋へ来てもいい」と申し出たのだが、杏は流石にそんなことは失礼過ぎると却下。結局、この状態で落ち着いた。

・マンゴープリン＆夢路雪乃

・緋水＆亜差霸蚊

・K（私）＆長谷川千雨

・杏＆清浦刹那＆エヴァ

「それじゃあ朝倉君に古君、それにザジ君も、今日は呼び付けてすまんかったのお」

「別に問題無いアル！」

「ふっふっふー、転校してきた日には質問攻めにさせてもらうからね、それに比べたらこのくらい安いもんですって！」

「……」

だから君は何か喋れ、ザジ。

「それに長谷川君、転校生だからまだ慣れていない事も多いだろうからの。色々と教えてあげてくれんかのぉ」

「……はい」

「それじゃあ今日は解散してよいぞ。転校生の皆は明日生徒証その他諸々を渡すからのお。各部屋に電話するから、そこら辺の事よろしく頼むぞい」

「……………はい！」「……………」

…ノリいいなあ、皆。私もだけど。

エヴァの家に行って荷物を持ち出して千雨の部屋に行く。

ここだけの話だが、杏がエヴァと一緒に生活すると知って、エヴァが若干嬉しそうな顔をしていたのは内緒だ。

そして女子寮。男子が普通に入って行つたのに特に何も言われないのは、先に知らされていたからかそれとも魔法のおかげなのかな？

まあなんでもいいけど。

指定された部屋へと向かう男子組と別れ、千雨の部屋へと急ぐ。

「（コンコン）もしもし千雨ちゃん、Kだけど。開けていいかな？」
「いいぞ、別に」

開けてみると、基本的に白で統一された割と大きな部屋が現れた。

「おおー、いい部屋だねえ。これから共同生活かあ、よろしくね千雨ちゃん」

「ああよろしく。あとちゃん付けやめろ」

…ほう。

「校長室にいたときは結構イライラしてたように見えただけだね。今はそんなことない？」

「ああ。決まったもんは仕方がないしな。今更ぐだぐだ言ったりしねえよ。」

…ま、非常識さに頭を抱えちゃいるけどな」

「ああ、やっぱり…」

そういった瞬間、千雨がぱつと振り向き言った。

「…今、やっぱりって言ったか？それはつまり、お前もこの非常識さに気づいているって事だよな？」

「そりゃそうでしょ。外でこんな技術無いし」

ダンボールに積めた服をタンスにしまったりハンガーに掛けていく。

「…はあ、よかった。本当によかった」

「いつでも相談に乗るよー？自分で言うのもなんだけど、こう見えても面倒見はいい方だからね。」

可愛い女の子と友人に限るけど」

「んなっ！？／／／」

一瞬で顔を赤く染める千雨。

「んふふ、照れちゃって。かーわいい♪」

「ほっとけくそっ！／＼／」

「可愛いつて言われてねえどんな気持ちwww？どんな気持ちwww？」

「おちよくな！／＼／」

うん、やっぱり千雨をルームメイトにしたのは正解だったかな。
凄い楽しいwww

「あ、後で買物に付き合ってくれない？色々欲しいものがあるんだよね」

「欲しいもの？」

「調理器具一式。余裕があればパソコン見ておきたいんだよ。だから、自分用のパソコン持つてる千雨ちゃんにオススメ教えてもらおうかなーと。あとは小物をちょっと買おうかな？」

「ま、それくらいならいいけどよ」

「ありがとー♪」

「ばっ、くつつくな！」

「…お前、重くないのかよ？」

「んー？ちよつと重いけど、持てないほどじゃ無いかな。重い物持つの慣れてるし」

「ふーん…」

調理器具一式を揃えたので、電器屋へと向かう。
千雨ちゃんのオススメらしい。

…あれ？

「杏！どうしたの？」

「ん？K…ちょっと買物。ついでにパソコン見ようかなと」

「本当！？じゃあ一緒に行こうよ！私もパソコン見に行く途中だから！」

「ん、いーよ」

杏と合流したので、一緒に電器屋へと向かう。

杏と千雨が話してるけど、何話してるんだろう？

「…あ、ゲーセン」

「寄ってく？」

「寄ってこうか！」

「ちょ、おい！」

「いいじゃんいいじゃん♪」

慌てて引き止める千雨ちゃんも連れて、一路ゲーセンへ。入って気づいたけど、ゲーセンのラインナップが2011年とほぼ同じな件。麻帆良すげえ。

「…まあ今日は予定無いからいいけどよ…何やるんだ？」

「ん？私と杏は音楽ゲームとSTGが好きだよー」

特に音ゲー…あ、あつた」

「DDRはX2か…よかった」

杏が安堵の溜息を吐く。私もExtremeとかだったらやらなかったかも。

丁度三人の女の子が踊ってる途中だった。曲は…「凜として咲く。の如く」のEXPERTか。私にもあんな時代があったなー…

「ん？ありやあ…明石か？それに…和泉と佐々木か」

「知り合い？」

「クラスメイト。つまりお前らのクラスメイトになる奴らだよ」

「へえー」

なるほど、明石裕奈と和泉亜子、それに佐々木まき絵か。
踊ってるのが明石裕奈かあ。

「あれ？千雨じゃん。ゲーセンにいるなんて珍しいね？」

「それにそっちの子はー？」

私たちに気づいた三人娘が声をかけてくる。

「こいつらは転校生、私は買物の付き添いだ」

「へえー！あ、私は明石裕奈！気軽にゆーなって呼んでね？で、こ
つちがまき絵と亜子！」

「ちよつとゆーなあ！」

「あははー、あ、次やる？私の番終わったし」

見ると、画面に「Thank You for playing」
の文字が踊っていた。

「ん、私はK！呼び捨てでいいよ！次やるー」

「あんぎゃーす。呼び方はなんでもいいよ」

そう言つて壇上に上がり、カードとクレジットを入れる。財布の中
身（カード類）が無くなつてなかったのは僥倖だったなあ。

「ちよ、ゲーシ凄っ！？」

「あはは、そこそこやってるからね」

これでも一応足鳳凰だからねえ。
まあ私より杏の方が数倍上手いけど。

「杏ー、課題ー」

「久しぶりにやる訳だし、ヨロロ激と金セイバー激、パリス激でいいでしょ」

「りょーかーい」

早速一曲目を選択する。

『ファースト ステイジ！レディ？』

「な、なんか私が全く出来無いような凄い曲を選んだような…」

「そんなに凄いの？」

「見てればわかるよまき絵…」

（タッタッタッタッタッタッタッタッタッタッタッタ
ン！）

「「「「「！！？」「」「」」」」

「ちょ、早くて見えない！？」↑亜子

「凄い！」↑まき絵

「うわぁ…生で見るとこんななんだ…」↑ゆーな

「いやいやおかしいだろ人間に出来るかこんなの？」↑千雨

「なるほど、檯台はX2でもプレイヤースキルはExtremeなのか…変なの」

（タタタッ タタタッ タタタタタタン！）

「んー…ぎりぎりAランク…やっぱり数日やらないと落ちるなあ…」

「じゃあ次はこれっ」と

・ 3 曲終了

「まあこんなもんかな？」

「「「いやお前人間じゃない」「」「」

「何言つてんの、私が人間じゃなかったら杏はなんだってのさ」

「え、Kさんより上手いの？」

「私の数倍上手いよ」

「「「嘘っ！！？」」「」「」

「んー…じゃあ私もやろっかな。鬼ハデス鬼新ディケ鬼ボゼでいいか」

・ その後、ゆーな達は何を見たのかは想像にお任せします。

「お前らおかしいだろ！」

「「いや普通普通。私達より上手い人なんていっぱいいるし」「」

「どんな人外魔境だよ！？」

あ、パソコンショップは行きましたよ？
よさ気なのはあったけどまだ買ってない。
そのうち買おうかな？迷うなあ…

転入マダー？（A A略）（後書き）

クラスメイトの邂逅をお届けしました。

こつちにゆーな達が来てたので、男子側では白き翼の主要メンバーと邂逅してると思います。主に明日菜とか木乃香とか。

清浦さんは別の所へ買物に。杏の指示ならばと涙を飲んで別れたそうです。

因みに途中の麻雀は天和以外実話。

ゲームは麻帆良クオリティでそこそ未来のものが開発されてたり。DDRに関しては…ニコニコで探せば譜面が出ると思われ。

そして杏を含めたすべての参加メンバーに謝罪を。
しかし後悔していない。

さあて次のメンバーは清浦刹那さんだよ

×切りは7月23日までだよ

ちよつと真面目に話してみたよ！（前書き）

いや〜

ちよつとはっちゃけてしまいましたが大丈夫かな？

大丈夫やね、多分

ちよつと真面目に話してみたよ！

（夢路視点）

皆が寝静まったころ。

ちよつとエヴァに会いに行く。

「きつちり話をしておかないとな」

杏さん達も寝てるころだろうし。

エヴァの家の戸を叩く

「はい、どちらさまでしょうか」

茶々丸の声が返ってくる。

「あ、夜分遅く申し訳ない、世話になった夢路です。少々エヴァンジェリンさんと話をしたくてお尋ねしたのですが」

「少々お待ち下さい」

その言葉のまま、暫く待つと茶々丸が出てきてエヴァの所まで案内してくれた。

「どうも」

取り敢えず挨拶。

「まあ、座れ」

しかし、見れば見るほど小さいな。まあ、舐めてかかりはしないけど。

「今回は魔法について聞きたい」
「…例えば」

ここから始まるぞ…。

受け答えを間違えてはならない。

「膨大な魔力が俺達の中にはあると言いましたよね」「ああ、言ったな」

「ということは、練習すれば魔法をつかうことができるようになる」と

「さあ、どうだろうな」

…駆け引きがいるか。

仕方がない、第一の切り札！

「エヴァンジェリンは甘い食べ物好きですか？」

いきなり話を変えたのに少し驚いたエヴァだが、すぐに笑う。

「まあ、好きだが」

「はい、これお土産」

作ったのは、羊羹。

滅多に見ないだろうし、あまり口に残らないように作りあげた。

「なんだこれは」

「教えるかわりに、魔法について話して頂きたい。ちなみにこの食べ物も差し上げますよ？」

暫くの沈黙。

「食べたことあるから取引にならん」

さて切り札はあと二つ。

とっておきを出すか。

「もし教えていただけたら…」

(ゴニョゴニョ)

魔法についてまとめてしまうと

魔法には才能が伴う。

属性の違いもあり、性格によっては、遠距離タイプなど魔法の使い方が変わるらしい

ちなみに魔法で出来そうなことならある程度のことなら出来るらし

い。

で

スイッチが入るタイミング、つまりは覚醒時期も人それぞれらしい。
無理矢理入れることも出来るらしい。

「無理矢理入れる、って具体的には？」

「まあ、魔力を流し込みちよつと暴走させる」

大分危ない話だけど…。

「やってくれないか」

「は？」

「いや、だから無理矢理覚醒させてほしいんだ」

エヴァはくつくつく、と笑い

「どうなつても知らんからな」

そう言つて、俺の手を取り魔力を流し入れた。

瞬間的に頭がフラッシュをまともに見てしまったように弾けた。

「…っ」

熱い、何かが体の中を暴れている。

（エヴァンジェリン視点）

「苦しいだろう？」

夢路とやらが、目の前で暴れている。

実際に暴れているわけではない、魔力が暴れているのだ。

しかし、こいつは馬鹿だな。

わざわざ、苦しむ道を選ぶか。

「何の為にそこまでするのかわからんな」

だが、魔力を流し込むときにかすかに見たのは、感じたのは深い後

悔と痛み。

「まあ、人間らしいがな
人間、か。」

あいつは一体生きているのかすらわからない。

「人間は、馬鹿だな」

（夢路視点）

「つつ…」

熱いのが治まり、徐々に視界も戻ってきた。

「どうだ、気分は」

エヴァの声が聞こえる。

「最高だね」

取り敢えず強がってみた。

「さて、練習方法だが」

エヴァは聞く前に、教えてくれた。

さて、また長くなったからまとめよう。

まず、指先とかに集中させてみる。

そして、徐々に範囲を広げていく。

左腕から右腕まで流してみたりしてコントロールできるようにする。
で、それを練り合わせたり、詞に紡いで魔力を具現化、って感じかな

「で、一応動かせるようになったけど」

エヴァに魔法について聞いてから一週間。

皆には内緒で練習しているが、そろそろ試してみたい。

「出来たら良いなで精神で…」

アニメを思い出してみる。

確か、

「材質の構成」

取り敢えず鉄鋼。

「型の構成」

基本に忠実に剣。

そう、あれは金色に輝く剣。

それは勝利を誓った剣。

名前は…。

トレース オン
「投影、開始」

光が放たれる。

「つつ…」

ちよつと早すぎたかな？

いきなり、これは…。

「来い…約束された勝利の剣！^{エクスカリバー}！」光が一段と強くなる。

光が収まった時、右手に握られていたのは…。

「あゝ、やつぱり？」

出来たのは紋様が彫られた鉄の剣。

「完全に偽物か」

もつと練習しろってことかね。

仕方ないので、投げナイフとかクナイとかを生産してみる。
量産するに越したことはない。

いきなり目の前に手裏剣が飛んでくる。

「え」

いやいや、狙われる理由ないけど

ネギまの世界で忍者と言えば…。

「長瀬楓さん、ですか？」

首筋にはクナイ…というか、俺が作ったやつじゃないか！

さすが忍者！

「何故拙者の名前を」

これって大分まずいよね。

口先の魔術師、発動…（言い訳）

「いやね、エヴァンジェリンさんから聞いたからかな。ここに忍者が居るって」

頼む、これで何とか。

「そうでござるか」

納得早いな…。

そうだ！！

「忍者の修行をしてるんですね？良ければ教えてもらえないですか」

「ん…」

悩んだ後に了解をもらえた。

それからと言うものの午前中は楓と忍術修行を、昼から時間があつたら魔術の練習。

もうすぐ入学するんだよな、あのクラスに。

「亜差霸蚊」

「ん？何」

ある日通りかかった亜差霸蚊と会ったので、軽く魔法について話しておいた。

その後廊下に出たら、何か甘い匂いがしたが、誰かお菓子でも作っ

ているのかなと予想し、あまり気にしなかった。

楓の修行を受けて一週間。

ふと楓が聞いてくる。

「夢路殿はなんの為に強くなろうとしてるんでござるか？」

あまり深くは考えなかったな…。

魔法については言えないし。

「友達がたくさんいるんだ。その人達を守る為に、かな」
無難な理由だろう。

「そうでござるか」

なんか笑われたけど…。

俺の方が歳上のはずなんだけどな…。

さて、もうすぐか。

ちよつと期待に胸を膨らませ（ちなみに胸はないぜ？ry）朝食に戻る。

ちよつと真面目に話してみたよ！（後書き）

さて、魔法が使えるようになりました！
（ババーン）

さて、亜差霸蚊よ
後は任せた

てなわけで次回は私
一応26日までえゝ

転入生?!で……何?この発展?!(前書き)

参加者の皆さん、楽しみにしてくださった皆さん、遅れて申し訳ないm(――)m

自分なりに頑張って書いたんだあ!

ちなみにタイトルどおり今日から転入生来るよ(笑)

ではいつてみよー!

転人生?!で……何?この発展?!

「うゝたつた一教科だけじゃゝん」

一人の少女は廊下をぼやきながら歩いていた。

「テストとか範囲広いから勉強しなくちゃゝって徹夜したらテスト中寝ちゃったとか……不可抗力じゃん」

その少女は前担任の教師に渡された地図を頼りに学校のある一室の前に来ていた。

その部屋にかかった表札には「特級」……。

「はぁ……私も今日からここ通いか……」

少女はその部屋の扉に手をかけ、ゆっくりひいていく。

「おはようございます……ってあれ?」

少女は中に入り、後ろ手に扉を閉める。

「まだ来てないのかな?」

少女は教卓の上に貼られた座席表から空いている席を見つけ荷物をおろした。

「8時21分……普通だったら来てるくらいの時間だよね」

その少女はただ遅れているだけなのだろうと思い、待つことにした。

だが、一向に現れる気配もないまま時間は9時をさしていた。

「おかしい……先生まで来ないなんて、職員室いつてみよ」

少女は立ち上がり、扉に向かった。

そして扉に手をかけ、開く。

「あれ？……ここどこ？」

少女が出たのは木々がおおいしげる森だった。

「いやいやいや……ないないない……だって学校にいたし！」

くるつと振り返ると扉はなくなっていた。

「なんでさああああー！」

そう叫んだ瞬間、少女はまばゆい光に包まれ気を失った。

……

「おい、おい、大丈夫か？」

少女は体を揺すられる感覚と小さく呟く声に目を醒ました。

「おお、大丈夫やったか？」

「マンガー、その娘起きたのか？」

少女は見知らぬ男達が自分の周りにいることに驚いた。

「あなたたちは？」

「俺はマンゴープリンで、そっちのが亜差霸蚊であっちが緋水や」

「マンゴープリンさんに亜差霸蚊さんに緋水さん……って、特級の人達じゃないですか！こんなとこで何やってるんですか？！」

それが、少女と特級メンバーとの出会いだった。

~~~~~

「なるほどなあゝ特級に落とされて教室で待ってたら俺らがけえへんから先生呼ぼうおもて出たら森やつたんやな？」

「はい……でも皆さんと会えてよかったです。どこの誰かもわからないがような人でなかったのだからさ」

「ごもつともだな。とりあえずついてきいや。他のメンバーもおるからさ」

「他のメンバーと言うとあんぎゃーすさんやKさん達ですか？」

「そうだがゝ後は夢路やら清浦さんやらなあゝ」

「ところで、皆さんは何してらしたんですか？」

三人の風貌は、帽子に軍手、カゴの三点セット

「何というときのご狩りと山菜摘みやな」

「松茸とシメジしかわからなかったからその類しか採ってないけどなあ」

そういう亜差霸蚊のカゴにはシメジと松茸がゴロゴロしてるが、中に赤い斑点つきのきのこがいくつか入っていたりする。

「あはは……（大丈夫かな？）」

その後話をしながら山をおりた四人は特級メンバーを呼び出し学園長室に向かった。

~~~~~

「と、ゆー訳で蒼の空音さんや」

マンゴープリンに押し出され皆の前に出る。

「こんにちは…蒼の空音です。よろしくお願いします」

空音は小さくお辞儀する。

元からいたメンバーは気兼ねなく挨拶を交わしていく

「さあて、仲間が増えたってことでぬらりひょん」

マンゴープリンの言葉の矛先が学園長に向けられる

「フォッフォッ…なんじゃ？」

「確か1部屋か2部屋ほど1人で使ってる部屋あったよな？」

「確かにザジ君の部屋と朝倉君の部屋と、それから古菲君の部屋もか」

「よし、住ませろ！」

この無茶な提案にはタカミチが声を荒げた。

「いくら学校が始まっていないとは言え、これ以上増やすのはどうかと思うよ」

「タカミチは黙ったとき、これはこつちとぬらりひよんの話や」

「いやいや、僕もこの学園の教員だ。異論を唱える権利だってある」

「なら何か？こんな子をまたもといった場所に置いて来い言うんか？」

「そこまでは言っていないだろう。ただこれ以上学園に人を増やすのはどうかと言っただけだろう」

「ほんま頭固いやつちゃん、こつちだってかくしかじかな理由があるんじゃない！」

「学園にだってかくしかじかな理由があるんだ！」

「おお？なら言ってみい？そのかくしかじかな理由とやらをよお」

S i d e 部外者

「どうでもいいんだがさ……俺ら陰薄くね？」

「まあいつもの事だろうしな……てかかくくしかじかで伝わんのか？」

「普通は伝わらない……だけど、あの2人に何かあるのかも」

「私とお姉様みたいな間柄ですね」

「とりあえず、馬鹿だろ……」

「まあまあ、皆さん落ち着いて」

S i d e 関係者

「はよう言つてみい言つてるやろ」

「そちらこそ理由があるんだろ？聞いてやるから早く吐け」

「つさいなあ、テメエが言い出したんだろが、早く言えよ！」

「僕が？いや、君が言い出したんだ。だから、早く言え」

↓ 数十分後 ↓

部外者達は呆れ始めていた

「いつまで続くんだ？」

「私に聞かれても……ねえ？杏」

「だからって私に振らないで」

「平和的な決着方法提案してくるわ」

亜差霸蚊はタカミチとマンゴープリンの間に入り話し始める。
タカミチとマンゴープリンはよく聞こえるように近づいて行く。

「賄賂の受け渡しみたいですね」

「右に同じく……どうみても賄賂の受け渡し」

「いや……でも、亜差霸蚊さん平和的な決着方法とかって」

「Kさんよ。さっき、行く直前の奴の顔見たか？」

「いや、見てないですけど？」

「……笑ってたぞ……」

夢路の言葉に一同は青ざめ、今だに続く談合を見守った。

〃〃 移動中だよ 〃〃

「はいはいはいつてわけで、タカミチとマンゴープリンにバトっ
ていただきましょう」

一同は学園長室から大樹前広場に来ていた。
そして超ハイテンションな亜差霸蚊

それを尻目にうなだれるクラスメイト

「これが、平和的な決着方法……か……」

「……って、違うでしょ！」

「笑ってたって聞いた時点でとめるべきだったかな」

「何かあったか？」

「そういえば、亜差霸蚊さんも夢路さんもネギま知識はあんまりでしたっけ？」

「古菲が強いとか楓姉が強いとかくらいかな」

「タカミチ……目茶苦茶強いです」

「あれ……なんつつたっけ？咸卦法だっけ？気と魔力の結合」

「それに加えて遠距離打撃……普通に戦えますしね」

「ごめん……あいつシバいてくるわ」

夢路はそんな中を抜け出す

「さあさあ！皆さん盛り上がっていきましょ……って夢路どうした？」

「ちよつとこつち来い」

亜差霸蚊は実況席から引きずられて行く。

「ちょっ、何？何んなのさ」

「後で言つてやるから黙つてろ」

「行っちゃいましたね」

「でもマンゴープリンさんもわかつてこの方法を取った訳だし」

「何か策でもあるんだろうな」

「もしかしたらさっきの賄賂がホントだったりして」

そんな時だった。

亜差霸蚊が引きずられて行った方から悲鳴があがる

「御役目お疲れ様、亜差霸蚊さん」

「おやすみなさい」

「緋水さんも杏もちっと酷くないかなあ？」

「ただいま、とりあえず」といたから」

「まあ今更亜差霸蚊さん殺つても意味ないんだけどな。2人共すつげえ臨戦体勢だし」

緋水の視線の先、麻帆良に中心にある大樹の前でマンゴープリンと

タカミチは睨み合いを続けていた。

「いいのかい？ただ事じゃすまないよ？」

「あんたこそ、俺に勝てると思ってるんか？片腹痛いわ」

「なっ？！ふっ、青二才の分際でなめた事を……」

S i d e 部外者

「挑発しあってんなあ」

「ほんとに、てかレベルが小学生だな」

「でも、これ誰がスタートかけるの？」

「さあ？つかこのままバトルは消えてゝみたいなノリないかな？」

「さあゝゝさあさあさあ睨み合いもいい感じにヒートアップしてきた模様ですねえ」

亜差霸蚊がいつの間にやら実況席に座ってマイクをにぎりしめていた。

「あっ！あいつ！」

「そんなに実況席座りたかったのかな？」

「そんなもんか？」

あーだこーだ言ってる外野には目もくれずに亜差霸蚊は叫ぶ

「じゃあ無制限、ぶっ潰れるまで手加減無し勝負始め」

「やっちゃったよ……てか亜差霸蚊ようゝタカミチってすっげ強いらしいぞ」

「ん？知ってるよ。居合拳とか咸卦法とか笑う死神とか」

「コイツ、めっちゃ知ってる。ってかわかっててすすめるなよ……」

「だってゝその方が燃えるじゃない？」

「死んどけ」

夢路の延髄蹴りがヒット

亜差霸蚊は倒れた

「だけどまあゝ始まったもんは仕方ねえか」

夢路は腕を組み事の行方を見守ることにした。

「ふっ威勢の良いことをいいながらその程度か？」

タカミチは慣れた体捌きでマンゴープリンの攻撃をいなしつつ、反撃の手を出す。

「はっ、あんたこそ言う割に当たってねえけど？」

マンゴープリンも拙い体捌きの割に綺麗にかわしていく。

「だが、いつまで続くかな」

タカミチが右手を戻すタイミングに合わせて、左足を振り上げる。

「見え見えやで！なんあたらんわ！」

マンゴープリンはタイミングの回し蹴りを潜るように避けると、前に踏み出す。

そのままタカミチに倒れ込むように右肩でタックルする。

「どうした？足でも吊ったか？」

「うつさいわ！やけど、よそ見してる暇あんのか？」

マンゴープリンは右肩を引くと同時に右手でタカミチのズボンを掴む

「何っ?!」

そのままの勢いで振り抜く

タカミチは足を投げ出す形でマンゴープリンの足元に背中から落下する。

「終わりや、タカミチ！」

マンゴープリンは掴んでいたズボンを離し、右手で握り拳を作る。その右手を薄紫色の光がつつみだす

「君は、魔法を?!」

「昨日練習でやったらたまたま出来たんや！喰らっとけや！」

マンゴープリンは、その腕をタカミチ目掛けてまっすぐに突き出す。

「だが、隙がありすぎる。」

タカミチは右手をズボンのポケットに突っ込む。

そしてマンゴープリンの魔力の拳がタカミチに当たる直前、マンゴープリンの足元を何かが打ち、タカミチの体を攻撃のライン上から投げ出す。

「噂に聞く『居合拳』か」

マンゴープリンは右手を引き、タカミチをまっすぐに睨みつけながら話し出す。

「僕のこれは噂になっているのか、恐れいったね」

「ははは、楽しんできてたわ！」

「これが楽しい……か」

タカミチは両手を双方のポケットに突っ込み、軽く笑みを浮かべながらマンゴープリンを見据える。

「なら噂のこれを避けられるか？」

タカミチが地を蹴る。

マンゴープリンは右手で顔、左手で胸の前を隠し、少し深く腰を落とす。

「1発目はサービスだ!」

タカミチの右側の空気が揺らぐ

それにコンマ何秒か遅れてマンゴープリンの体が後ろに押される。

「おら、耐えたったで!」

「サービスだと言っただろう!」

今度は左側の空気が揺らぐ

そしてまた遅れてマンゴープリンに着弾する。

だが今回は先のと訳が違った。

マンゴープリンの体が体長の倍くらいは押し返され、胸を隠していた左手が弾かれる。

「3発目だ」

再度右側が揺らぐ

それはマンゴープリンの左肩を弾いた。

一瞬マンゴープリンは顔をしかめるが、すぐに睨み返す。だが、睨み返した先にタカミチはいなかった。

「気づくのが遅い」

タカミチはマンゴープリンの左側に身を屈めた状態で笑っていた。

マンゴープリンはすぐに防御の体勢を取ろうとするが、左手が言うことを聞かなかった。

「くっそ！」

「ゲームオーバーだ」

タカミチは自身の右手を振り上げ、マンゴープリンの右手を弾きあげると、右手を引く反動を使い左手をまっすぐに突き出す。

ガードしていた手が弾き上げられた事により、もろにもらう。

マンゴープリンは跳ね上げられた頭を無理矢理に引き戻す。

そんなマンゴープリンの耳に入ったのはタカミチの声だった。

「お帰り！」

タカミチは右手を下まで引き下げて待っていた。

マンゴープリンは咄嗟に右手をガードに回そうとするが、振り上げられた拳より早く守れるはずもなく、顎に渾身のアッパーをもらい、軽く体が宙に浮く。

タカミチは左手をポケットに突っ込むと、とどめと言わんばかりに居合拳を見舞う。

マンゴープリンの体は綺麗なアーチを描きながら十数メートル向こうに体を打ち付け、転がった。

「終わりか、呆気なかったね……」

タカミチは胸ポケットから煙草を取り出し、火をつける。

ふうと一息つくと身を翻し、夢路達を睨みつけた。

「これに懲りたら調子にのらないように」

そっぴいながら歩き出す。

だが歩き出したタカミチは、突然立ち止まった。

夢路や緋水達もタカミチが何故とまったかなどわからなかった。

「タカミチのやつどうしたんや……」

「わからない……でも、すごく、空気が重い……」

「杏お姉様」

刹那は座り込んだ杏の横にしゃがみ込む。

「確かに……何故か気分が悪い……」

緋水も口に手をあて、しゃがみ込む

「あれ……皆見て」

Kは何かを指差し、それを見るように言う。

それに惹かれる様に皆の視線がタカミチの後ろを捉える。

そこにあっただのは温厚そうなマンゴープリンからは想像も出来ない
ようなまがましい影だった

「まだ、たっていられるのかい？マンゴープリン君」

タカミチは煙草を名残惜しそうに地面に捨て、踏み付けて火を消す。
「いい加減にしたらどうだい？君には万に一つも勝ち目なんかないんだから」

タカミチが両手をヒラヒラさせながら笑った。
瞬間だった。

タカミチの姿が一瞬にして消える。
だがとてつもない衝撃波が地面を伝って辺りを襲ったことにより、何が起こったかを悟らせた。

タカミチは消えたのではなく、人の視覚が捕らえられる限界を超えた速度で地面にたたき付けられたのだ。

「何が……起き……た？」

タカミチは砕けた地面の中心に大の字になり寝転がる。
自分が何故空を見つめているのかもわからないくらいスピードだった。

それをした本人は、どこにも見当たらなかった。

だが何も見えないまま地面に寝転んでいたタカミチの体が宙を舞う。

その真下に今までいなかったマンゴープリンが立つ。

そのマンゴープリンの姿は鬼神そのものだった。

体の至る所に黒い模様が浮かび上がり、すでに目は光を失ってさえ

いた。

S i d e 部外者

「あいつあんなに強かったのか！！やばい、予想外の展開だ……」

実況席では亜差霸蚊が驚きの声をあげていた

「良からぬ事を企んでいた証ですね」

「なんか元からいた3人て仲間の陥れあいしてるような」

「緋水さん、それはないな。まあ亜差霸蚊の雰囲気的にマンゴープリン死んだら俺がリーダーじゃね？的な感じだろ」

「絶対じゃないんですけどね」

「まあ100%ないな」

皆の視線が亜差霸蚊に向いたが、轟音に驚き音がした方を見つめる。

タカミチの体が更に空中に舞い上がっていた。
マンゴープリンの姿も捉えることが出来ない。

ただタカミチの体が弄ばれている間、聞こえ続けている唸り声とマンゴープリンを追従する大きな影がマンゴープリンの怒りを悟らせた。

だが次の瞬間、タカミチの真横に両腕を広げたマンゴープリンが現れる。

「■■■■■■■■■■ッ!!」

マンゴープリンは両腕をクロスするように振り下ろす。
その両腕はタカミチには触れていないが、衝撃波がタカミチを撃った。

吹き飛ばされたタカミチは体勢を立て直そうとするが、一瞬空気が歪んだと思った瞬間にはありとあらゆる方向からの打撃の嵐が襲う。

部外者SIDE

「まさか……マンゴーにこんな力が……」

「あんなやつが友人だとはな……恐れ入ったぜ」

「それは言ってるな……素直に驚きだわ」

「それを知らなかったのにも驚きですけど……」

「けどあの調子なら勝つんじゃないか？」

「てか、マンゴープリンさんてマジ人間ですか？」

「正直、人外だろ」

そんな驚きの間中も空中で繰り返される乱舞に身を弄ばれるタカミチ
タカミチはすでに気を失いかけていた。

そんなタカミチの左頬にマンゴープリンは容赦無くパンチを見舞う。そのパンチにより空中姿勢を崩したタカミチの胸倉を掴み上げ、更に高くに放り投げる

タカミチはまた無防備に空中に投げ出される。

そこにマンゴープリンの超速アッパー（視界に捉えられない速さ）で更に打ち上げ、続けてムーンサルトでまた打ち上げる

直後、マンゴープリンの体がぶれたかと思うとタカミチの少し上辺りに待機していた。

マンゴープリンは身を小さく抱え込むと、タカミチの腹目掛けて右足を伸ばす。

その右足がタカミチの腹を捉えた。

マンゴープリンはタカミチの腹に蹴りを入れた体勢で空中から一気に落下していく。

S i d e 部 外 者

「あれは…かの有名なライダーキック……」

亜差霸蚊はおどろきを隠せないでいた。

「いや、ライダーキック……か？」

夢路は確かにライダーキックなだけに答えに迷う

そんな二人の目前で大きな轟音をたてて土煙が立ち上る。その土煙の中を悠然と立っているのはマンゴープリンだった。

マンゴープリンは相当体にきているようで呼吸が荒い。

そのマンゴープリンは遠くに吹き飛ばされたタカミチを見つめる。

勝利に湧いたのもつかの間、先程の土煙の中で何かを踏み付ける音がした。

マンゴープリンは即座に構えなおすと、土煙に向かって走った。

マンゴープリンが突っ込んだ勢いで土煙が晴れ、立ち上がったタカミチとそれに留めをさそうと右手を振りかぶるマンゴープリンの姿があらわになる。

「■■■■■■■■ーッ!」

マンゴープリンが右手を出そうとした時、マンゴープリンの体が何かに縛られたかのように硬直する。

「なっ?どうしたんや?」

タカミチも部外者達も本人でさえも何が起きているのかわからなかった。

だがそれはマンゴープリンを取り巻いていた黒い気が薄れていくことで次第に理解していった。

魔力の使いすぎによるガス欠のようなものだが、ガス欠になるタイミングが悪すぎた。

タカミチはマンゴープリンの前髪を掴むと、反対側に投げ捨てる。

そしてタカミチの居合拳が炸裂し、ボロボロのマンゴープリンに更にダメージを蓄積していく。

「やはり……暴走が終われば只の青臭い餓鬼か」

タカミチは今までにないくらいの形相で居合拳を放っていく。

マンゴープリンの体は居合拳の乱打により右往左往しながら大空に打ち上げられていく。

「終わりだね……おやすみ。マンゴープリン君」

そういつてタバコをくわえたタカミチは振り返り、亜差霸蚊たちを見た。

そして勝ち誇った様に笑った瞬間、空を舞っていたマンゴープリンの体が超高速で地面にたたき付けられ土煙が立ち上る。

「もし立ちあがったとしても彼にはもう魔力はない。ただの人間にしては動けたが、それを望むのも無駄だろう」

「そんな……マンゴー！くそ！」

夢路が声を荒げて走り出す。

タカミチは一瞬驚いたような顔をしたが刹那のことで、顔に向けられた拳を受け止める。

「やめておけ、君では僕に勝てないよ」

「んなこと知るか！」

夢路は拳を引き、後ろに下がる。

「無謀だよ、君では勝てないと忠告してあげているんだ。素直に聞いておいた方が身のためだよ」

「大切な仲間があんな目にあってんのに！引き下がるかあ！」

夢路は右手と左手を胸の前で向かい合わせる。

「トレース・オン」

夢路が不可解な言葉を発したと同時に長い棒状の物が夢路の目前に現れる。

夢路はそれを手に取り、タカミチを見据えた。

「君も魔法を……だがあくまで物理戦を挑むか」

タカミチも軽く構える。

二人の目は互いの目を見据え静かに時を待っていた。

そして風が吹いた瞬間二人ともが走り出した。

タカミチの拳と夢路の棒がぶつかりかけた時

「ちょい、待ちいや」

遙か後方から聞こえた声に二人は固まった。

「夢路、これは俺とタカミチの勝負や……手出したらアカンやろ……」

マンゴープリンはフラフラと立ち上がる。

「まだ立つ力が残っていたか」

タカミチは改めてマンゴープリンに向き直る。

「いや、正直なかったわ。夢路が前に出てくれんかったらKO負けや。それだけは礼言うとくわ」

「マンゴー……」

夢路以外のメンバーも息を飲んで見守る中、マンゴープリンはしっかりと立ち、タカミチを睨みつけた。

「タカミチ！あんたもそろそろ限界ちゃうんか？何発撃った？見てただけでも相当数撃つとるやろ」

「確かに、だが君とは戦ってきた経歴が違っよ。まだまだ撃てる」

「そうか……なら当ててみいや！！」

マンゴープリンは自分の額に右手の人差し指と中指をあてがう。その隙間に小さな光の粒が生まれるのが見て取れた。

「さっきのタイムがなかったら、これすら撃てんかったからな。夢路サンキューな」

「だがそんな小さな魔力の弾で何が出来る？そんなものの一つで僕を倒せると、思っているのかい？」

「だから、言うてるやろ。当ててみいってなあ！」

マンゴープリンの声がきつかけでタカミチはまた居合拳を繰り出す。

マンゴープリンは手負いとは思えない動きで交わしていく。

「ほらほら！当たらねえぞ！タカミチイ」

マンゴープリンの挑発がタカミチを更に煽る。

「ならこれは避けられるか？」

タカミチの元から二発の居合拳が放たれる。

その二撃はマンゴープリンを左右から挟み込むように向けられていた。

「だから！当たらん言うとりやろ！」

マンゴープリンはギリギリまで引き付けて後ろに飛ぶ。

直後マンゴープリンの目の前でタカミチの居合拳が相殺しあう。

「この程度か！タカミチイ」

マンゴープリンはなおも挑発を続け、タカミチを更に煽る。

「チッ！！ならこれを喰らえ！」

またタカミチの元から二発の居合拳が放たれる。

「当たらん言うとりやる！」

マンゴープリンは軽く二発を避けタカミチを見つめた。だがその視線は次に来ていた居合拳に阻まれ、歪んだ。

「うわっ、あつぶな！」

マンゴープリンはすんでの所で身を引き直撃を免れる。しかし――

「それだけで終わりじゃない！」

マンゴープリンが顔を上げた先は空が歪んで見えた。

刹那、タカミチの居合拳連射がマンゴープリンを襲う。最初の三発が足元に着弾し、退路が塞がれてしまう。

その行動を制限された所に数発の居合拳が降り注いだ。

「タカミチ！お前は知らんやろ！俺の……能力を！！」

マンゴープリンは人間の言語とは思えない妙な掛け声を発しながら飛び上がる。

タカミチの居合拳がマンゴープリンに命中すると思った瞬間

マンゴープリンはプリンに擬態し、飛んできた全ての居合拳を交わした。

「そんな…馬鹿な！」

すぐにマンゴープリンは擬態を解くとタカミチに向いた。

「これで終わりか？なら、俺のん受けてみいや」

マンゴープリンは額につけていた指に魔力を注いで行く。
それによりマンゴープリンの指先が赤色に光る。

「だが、君の魔力はそんなにはず！それくらいの攻撃なら堪えられる！」

タカミチは居合拳を打ち出す準備をし始めた。

「わかってへんなぁタカミチィ」

マンゴープリンは小さく鼻で笑う

「どういうことだい？」

「俺がこんなちっけなもん使うと思ったか？」

そう言ったマンゴープリンの周りには赤黒い光の粒が漂っていて、
徐々に吸収されている。

「おい……マンゴープリン、何してる……なんか……力が抜けて、
く……」

亜差霸蚊の弱々しい声が聞こえたかと思うとそこにいた杏、K、夢
路、刹那、緋水、空音、最初にへばった亜差霸蚊が地面に手をつい

ていた。

「マンゴープリン君、君は一体何をしたんだ？」

「なんもしてへんよ。ただ力を借りようとしてるだけや」

言った直後二人を白い光が包んだ。

「?!……まさか!!」

タカミチはふと右に目を向けた。

「樹が……」

タカミチとマンゴープリンの目は二人を取り巻く程の光を発している樹に向けられた。

その光は構えているマンゴープリンに向かい、全て吸収されている。

「まさか……人の手によってこの樹の魔力が動くことがある訳が……」

「よそ見してんちゃうでえ!」

マンゴープリンの声にはっとし、タカミチはマンゴープリンに目を向け――

息を飲んだ。

マンゴープリンの周りを漂っていた赤黒い光が渦を巻き、彼を取り巻いていたからだ。

「君は一体ッ……何物なんだッ！」

「俺は……俺だああ！喰らえやあ！！全力で…魔貫光殺砲！」

マンゴープリンがタカミチ目掛けて延ばした右手の指先からとてつもない太さのレーザーが放たれる。

「くっ……だが、この程度！」

タカミチは一瞬気後れするもすぐに豪殺居合拳を放つ。

二つが交わった瞬間、すさまじい規模の爆発が辺りを包んだ。

「ほら、見る！やはりこの程度だ！」

タカミチは相殺したと確信し笑う。

「よう見てみいや。タカミチのアホ」

マンゴープリンの含み笑いに嫌な気を抑えることも出来ずに相殺して広がった爆風に目をこらす。

「まさか?!……そんな、馬鹿な……っ！」

マンゴープリンの魔貫光殺砲は爆散するどころか、最後に放たれた豪殺居合拳を取り込み、なお突き進む。

「これが俺の、全力じゃアアアッ！」

その光は呆然と立ち尽くすタカミチを飲み込んだ

一時の騒音の後、タカミチは広場際にある一軒の店の壁にたたき付けられていた。

「勝った……マンゴーが勝ちやがった！」

夢路が走り出し、次々と走り出す。

「マンゴー！なんやねん最後の！」

口々にいろんな事を話し出す。

「ちょっと……待てや……」

息をきらせながらマンゴープリンが振り返る。

そのさきには膝に手を付き、同じ様に息をきらせているタカミチがたっていた。

「タカミチ、これで文句ないやろ？」

「ふ……ああ、完敗だよ」

タカミチは手をヒラヒラとふりながら学園に戻る道を歩き出した。

そのタカミチの後方ではまだワイワイと騒ぐマンゴープリン達。

「彼らは一体何物なんだろうな……よくわからない」

そう言つてタカミチが肩を落とした時、その肩が不意に持ち上げられる。

「?…君達……」

肩を持っていたのはマンゴープリンだった。

「もうフラフラなんやろ? 肩貸したるわ」

「ああ……ありがとう」

タカミチとマンゴープリンを取り囲むように特級メンバーが歩き、騒ぎながら学園に戻って行った。

「というわけで、正式に蒼の空音さんが入ることになったぜ」

ドンドンチャンチャンパフパフ

「まあわしゃ最初から反対はせんなんだがな……」

「申し訳ないです……」

「まあええやんかあ、なにはともあれ無事入学出来るし、部屋も決まったしな」

そう、空音さんの部屋はザジと相部屋になった

「そうときまりや歓迎会だああ〜行くぞ！お前らあ〜」

と亜差霸蚊が張り切る横を皆がスルーしていく。

「さあさあ空音さんの歓迎会を……エヴァン家でいいか」

「そうだなあ〜広いし」

「とりあえず、私はK。自己紹介したけど、改めてね」

「はい、蒼の空音です。よくわからないですが、よろしくです」

「えっ？ちよつ俺置いていくなよ〜」

そろそろ学園長室の扉を抜けると、台風が過ぎ去ったかの如く静かになる。

「フオツフオ……これから騒がしくなりおるのぉ」

学園長ことぬらりひょんは窓の外を眺めた。

~~~~~

それからもうドンチャン騒ぎ

エヴァン家に突然押しかけたから叱られたけど、まあマンガープリ  
ンやら口先の魔術師やら人心掌握出来る奴らがいる側に勝てないわ  
な〜

結局、渋々なのはわからないが承諾してくれて、一緒に楽しく盛り  
り上がって……んで、鍋食って……。そっいや、空音っただけ食べ

なかつたな

まあ、とにかく！

なかなか壮絶な一日だったんだっぜ！！

転人生?!で……何?この発展?!(後書き)

はいはい

蒼の空音さん、カオスの世界へいらっしやい

ってなわけでタカミチとマンゴープリンのバトルを自分の出せる技で書いた訳ですが、駄文だね……

にしてもギャグから掛け離れて行ってる気がしたりしなかったりなこの小説(笑)

さあて次はマンゴープリンだ!

締め切りは9月13日だ!  
頑張れ!

## 転校初日（前書き）

どうも、マンゴープリンです。

私事で期限ギリギリになってしまいましたが、楽しんでもらえるとうれしいです！

## 転校初日

麻帆良学園にある女子寮の一部屋で今日もけたたましく目覚まし時計が鳴り響くが、その持ち主である男は五月蠅うるさそうにして寝返りをうつただけで起きようとしない。

なかなか起きてこない男にしびれを切らしたのか、もう一人その部屋にいた男が眉間にシワを寄せながら起こしに来る。

「おいマンゴー、さつさと起きろ！ もう朝やぞ！」

「お前は俺のオカンか」

ツツコミながらももそもそと起き上がるマンゴーを見て雪乃は溜息を一つつき、朝食を作り始める。

先ほど起きたマンゴーは先に用意していた着替えを持ち、部屋にあるシャワールームにフラフラと入っていった。

---

SIDE：マンゴープリン

シャワーを浴びたのに未だに半分ほど寝ぼけてる頭をタオルでガシガシと拭きながら部屋に戻ると、いつの間にか朝食が並んでいた。雪乃は初日から頼んでもいないのに勝手に俺の分まで作っているのである。別に助かるから止めたりしないけど。

「いつも通りのご飯やけどええやろ」

机の上にはT H E・和食と言いたくなるような料理が並んでいる。朝からよくこれだけの物を作れたもんだよ。料理出来ねえ俺からしたら考えられねえ。

「いただきます」

二人手を合わせた後もそそと食べ始める。うまい。

そんな感じに飯を食っているときに、ふといつもと様子が違うことに気がついた。何だろうと思いいく観察してみると、雪乃が制服を着ているのである。

「……今更気づいたんやけど、なんで制服着てん？ 鋼翼高校の制服でもないし」

「何言つてんだ？ 今日から転入だろうが。お前こそなんで私服なんだよ」

「あー……そうやったな。忘れてた」

素で今日が俺たちの初登校だったことを忘れてた。そういや目覚ましもいつもより早くに鳴るように設定していたな。

「学校めんどくさいと思わねえ？ 誰だよ学校行くとか言つたやつ」「いやいや、お前やる」

「そついやそうやな。でも面倒なことにはかわりないと思わん？」

「そこまで嫌がることでも無いと思うが？ お前つてそこまで学校嫌いだったっけ？」

「学校つてよりネギが嫌いなだけやねんけどな」

「ずつと思つてたんだが、そこまで毛嫌いする事でもあつたのか？」

「嫌いつてより気持ち悪いねん。ネギつて10歳のガキがエヴァの禁術を修得したり、魔法世界の在り方やら救出方法まで一人で編み出すんやで？ あれは人間じゃないって」

「確かに凡人から見たら天才なんかは化け物やな。だけど、お前は物理的に化け物じゃね？」

「ですよー」

実際ネギを嫌ってる理由は他にもあるが、そんなとこまで話す必要もないしこれでいいか。

そんなこんなで朝食も食べ終わり、学校に行く準備をする。準備と言ってもズボンを履き替えるだけだが。

「こつち準備できたでー。そつちは？」

「昨日のうちに終わってるよ。てかお前はさっさと制服きろよ！ズボン履き替えただけじゃねえか！カバンは！」

「別にええやん、授業中なんて寝てるか遊びに行ってるかしてるし、そもそも麻帆良ってエスカレーター式だから遊ぼうが馬鹿だろうが上がるっての。今までも、テストも入試も一夜ずけしかしたことねえしよ」

「はあ……。どうなつてもしらんで」

「大丈夫やつて。イベントの時だけ授業受けに帰ってくるから」

「（ダメだこいつ、なんとかしないと……）」

雪乃が内心不安がつてるとも知らず、隣の男子メンバーを呼びに行く。

「あーさはーかくーん、ひすいくーん、あーそびーましょー！」

間延びした声で名前を叫びながら、借金の取立て宜しく扉を高速ノックしながらチャイムを連打すると、扉が勢い良く開く。（迷惑になるので真似は止めましょう）

「うるせえ！！一回で聞こえてるっての！連打すんじゃねえ！」  
「寝てると思つてな。反省もしないし後悔もしない。キリッ！」  
「キリッ！じゃねえよ、間抜けが！近所迷惑だろうが！」  
「叫んでるお前の方が迷惑になりそうだと思うが？」  
「（コイツから始末してやろうか……！）」

そろそろ亜差霸蚊のこめかみの血管が弾けそうだからこれぐらいにしておこうか。

「で、用意出来たか？」  
「もう終わってるよ」

確認すると、奥からちゃんと制服を来た緋水が出てくる。そういや亜差霸蚊もちゃんと制服着てるな。

「お前らは真面目っ子か！」  
「初日ぐらい真面目にできねえのかお前は！」  
「亜差霸蚊にだけは言われなくなかった」  
「お前……ッ！」  
「まあまあ、落ち着いて。朝から騒いでもいいことないよ」

緋水になだめられて、亜差霸蚊はやっと落ち着く。緋水はどうやら亜差霸蚊の扱い方をマスターしてるようだ。苦労してんね。

「誰がさせてるかわかってるかい？」

聞かないし聞こえない。

「はあ、そういやKさんと空音さんは呼びにいかないのか？」

「この女子しかいない女子寮キルゾーンに一人で特攻する勇気があるのなら止めないが？」

「結局むこうで会いますもんね。先に行ってましようか」

「それが最善の判断だと思うよ」

その後、雑談しながらのんびりまったり登校しながら周りを見渡すが、人っ子一人いない。普通の登校時間より早めに出たからかもしれないが、この場面だけ見れば漫画のような通学ラッシュがあるなんて想像できないくらい静かだ。みんなもつと早起きすればいいのに。

「お前は早起き出来るんか？」

「無理」

「だろうな」

そんな感じに話しながら校門前に来ると、前方に麻帆良の制服着た女子生徒が4人いた。こんな時間に来てるのはあの4人だろうと当たりをつけ、声をかける。

「おはよー！ 元気かー？」

「そんなすぐに体調崩さないよ。まあ、おはよう」

想像通り、Kに杏に空ちゃんにせつちん。あだ名は今考えた、許可をもらうつもりもない。強制イベントである。

「早いですね。まだ結構時間に余裕がありそうなんですが」

「別に大丈夫でしょ？ 遅れるわけじゃないし、早くてもなんの問題もないよね」

緋水の言うとおり、皆集合時間よりも早くに集まったようだ。  
：俺集合時間忘れてたけど、黙ってたほうがいいな。

「早く集まったんならジジいんところでお茶でも出してもらおうぜ」

「出してくれるかな？」

「出せって言えば出すだろ」

「遠慮を知りませんね……」

俺の辞書に遠慮や手加減なんて言葉はのってないもんで。ジジイに対してだけど。

「ノックしてコンコンコーン！ 入るでー、オープンセサミー！」

三回ノックして返事が帰ってくる前に学園長室の扉を勢い良く開けると、定位置に後頭部ことジジイ、机の横あたりにMrホワイトことタカミチ、ジジイの前には我らが担任玉ねぎ……じゃなく、ネギがこつちを驚いた顔で見っていた。こつち見んなし。

「ホッホッ、丁度良いところに来たのう。今君たちのことを話したところじゃよ」

これはあれか？ フレンドリーになつとけよ的なあれなイベント

的なあれか。意味わからんな。

「はじめまして。俺の名前はマンガوپリンや！ 宜しく！」

「え、あっ！ どうもはじめまして、皆さんの担任になったネギ・スプリングフィールドです！」

「ネギ・スプリングラー？」

「いえ、ネギ・スプリングフィールドです！」

「タマネギ・スプリングラー？」

「違います！ ネギ・スプリングフィールドです！」

「ああ、なるほど。タマネギ・スプリングな！」

「全然違いますよ！ ネギ・スプリングフィールドですって！」

「え？ ネギ・スプリングフィールド？」

「違います！！ ……？ ツ！？ そうです！ それであつてます！」

「お前ら何やってんだよ……」

俺がネギで遊んでる内に雪乃たちは学園長と話終えていたみたいだ。しかし、真面目な奴をからかうのは面白いのう。

「このバカはほつといいぞ。それで、俺は夢路雪乃。隣の人らは順に、亜差霸蚊、緋水さん、あんぎゃーすさん、Kさん、清浦刹那さん、蒼の空音さん」

「はじめまして！ 僕が担任のネギ・スプリングフィールドです！」

「お前のあだ名は今日からオニオンだ！」

「ええー?!」

「ホッホッホッ、自己紹介が終わったようじゃの。これがお主らの生徒手帳じゃ」

いつの間にか机の上に8個の生徒手帳が並べられていた。俺写真とった覚えないんだけど、まあいいか。

「それじゃあタカミチ君とネギ君、彼らを頼むぞ」  
「わかりました！」

ネギは、元気いっぱいを体現してるような明るさで返事をするが、タカミチは苦笑気味だ。元気を付けてやろう！

「ほら元気出せよMrホワイト！ 幸せが逃げるで！」

「君に会っただけで幸せが逃げていきそうだよ。それと、Mrホワイトは僕のことかい？」

「他に誰がいるか？」

「いや、別に良さ」

なんかしらんが余計に元気が無くなった。トシか？

「どうでもいいや、行ってくんぜ！ じゃあな後頭部！」

ネギを先頭に、そのままそろそろと部屋を出ていく。

「……………後頭部ってワシのことかのう？」

ジジイのつぶやきに答えてくれる者はいなかった。

転校初日（後書き）

今回からやっと入学です。  
ここまで長かったのう。

次はあんぎゃーさんです。頑張ってくださいね！  
ではまた〜ノシ

期限は9 / 28までだあ

こつこつ時の女子のテンションは異常。もしくは舞台裏での交渉。(前書き)

いやあ遅くなりましてすいませんorz

ネギま1巻から読み返したけど、どう比較しても龍宮とか長瀬とか180cm無いんだ。

160cm越えてる奴を-10cm、それ以外を-5cmすると丁度いいくらいなんだ。だからこの1話の中ではそういう基準にして書いてるんだ。文句はいくらでも言いに来てほしいんだ。それだけ。

参考までに、クラスメイト何人かの身長。

龍宮真名、184cm↓174cm(最高値)

神楽坂明日菜、163cm↓153cm

近衛木乃香、152cm↓147cm

エヴァンジェリン、130cm↓125cm

鳴滝姉妹、128cm↓123cm(最低値)

どうでもいいけどイビルジョー倒せないんだ(´・ω・`)

こういつ時の女子のテンションは異常。もしくは舞台裏での交渉。

教室内にて。

「おはよーっ！」

「明日菜に木乃香、おはよっ！何、今日は早いじゃん？」

「何かネギが先生会議？やら何やらで早かったからさーっ、ついでにたまには早く来てみたっ！」

「「「おおおーっ！」「」」

朝から無駄に騒がしい3・Aの面々を見て、長谷川千雨は溜息をついた。

（うるせえ……）

机の上に突っ伏しながら、冷めた目で騒ぐクラスメイトを見遣る。何がそんなに楽しいのか、バカレッドこと神楽坂を中心に何人かがギャース力騒ぎ立てている。

（転校生の事を知ってんのは最低でも……私と古、パパラッチにザジ、明石に亜子に佐々木……エヴァンジェリンもか。後は知らんが、転校生の噂が無いってことはまだ知れ回ってないのかね。ま、どうせすぐに明石辺りが話し出すんだろっけだな。）

「そっいえば今日転校生来るんだっけ？ネギ君呼ばれたのってだからじゃない？」

（ほらきた）

千雨の言った通り、

「ちょ、転校生って何！？初耳だよそんなの！？」

「え？皆知らないの？この前千雨ちゃんとゲーセン来てたよ。ね、亜子、まき絵」

「う、うん」

「ああ、あの凄い人…」

言葉を濁した二人。それほどアレは衝撃的過ぎたのだろう。

「へへん、実は私、その情報知ってるんだよねー」

「和美！？」

何処かから現れた朝倉がニヤニヤと笑いながらドヤ顔。  
お前だけじゃ無いけどな、私もKとそこそこ話したし。

「情報求む！ジューズ1本！」

「2本は？」

「いいでしょう！ジューズ2本で！」

「まいど〜」

…こいつら馬鹿だった。

どうせすぐ来るのに、何で今聞くんだった…。

「私が知ってるのはねえ……」

朝倉が話しはじめようとしたその時、ガラリと音を立てて扉が開いた。

「皆おはよう。朝から元気なのは良いことだけど、とりあえず席に

着こうか？」

「…ジューズは無しで」

「わかってるって、だからそんなに睨まないでよ……」

入ってきたのはニコニコ笑いながら鳴滝姉妹の仕掛けた罠を払って  
いく高畑先生と、おろおろしているネギ先生。  
後ろで馬鹿な話をしてるが無視だ無視。

「高畑先生ネギ先生ー！転校生来るって聞いたんだけど本当ー！？」  
「うん、本当だよ。今そこまで来てもらってるから、とりあえず席  
に着いてね」

「「「はーい！」「」」

さてさて、どうなることやら……

あとネギ先生。高畑先生がいるからってのはわかるが、何か喋れ。

<Side 桜咲刹那>

この新学期が始まったばかりの時期に転校生……それも事前の調査  
では一気に8人、しかも半分は男性ということがわかってる。

…お嬢様を狙う輩という可能性は低くないだろう。

こつという言い方はいけないが、木乃香お嬢様にはそれだけの価値が  
ある。

「ええっと、連絡事項は終わったから……  
それじゃあ、皆さん入ってきてくださーい！」

ネギ先生の声にあわせて閉まっていた扉が開く。

「……………」

全員が啞然とした。その理由もわかる。

一人目は目測で龍宮と同じくらいの身長眼鏡をかけた男。制服を面倒そうに着崩しただらしない恰好をしている。

しかし顔こそへらへらと笑っているが、目はクラスメイトを観察しているように見える。こいつは要注意だろう。

二人目も同じくらいの身長の男。爽やかな、悪く言えば暑苦しい笑顔を振り撒いている。こいつはいったん保留か。

三人目は先の二人よりも小さいものの、それでも見た所朝倉よりは身長が高いだろう。

全体的に細く頼りないが、目には怪しい光が宿っている。これも危険な印象を受けるな。

四人目は最初の二人と同程度の身長の女性。特に何かある訳でもないが、一人目と同じように何かを観察しているような目の動きだ。

エヴァンジェリンを見て手を振っていたが、吸血鬼に関係があるのか？

五人目は同じく女性。四人目の女性の服を掴んでいる。

一見して物静かな印象を受けるが、細かい所に武道をやっていたような所作を見受けられる。剣道や柔道をやっている筋肉の付き方ではないし、弓道辺りだろうか？

六人目は前の女性を仕方なさそうな目をしながら入ってきた。そして…何よりも身長が高い。龍宮より大きいんじゃないか？

七人目は眼鏡の男性。絡繰と同じくらい少し高いくらいか。口元に笑みを浮かべてはいるが、目が笑っていない。

…一瞬視線が合ったか？恐らく気のせいだろうか…

最後は垂れ目の女性だった。身長は大体那波くらいか、それより少し小さいくらいだろう。

おどおどとしていて頼りない印象を受ける。どうも視線慣れしていないようだ。

一瞬視線が合ったが、ビクツと肩を震わせて目線を逸らされた。…流石にちよつと心が痛むのだが。

「「「おおおおおーっ！」「」「」

ぐあぁっ！？しまった、耳を塞ぎ忘れていた…耳が痛い…

「い、一気に転入生が8人も！」

「しかも半分男！」

「え、どうして男！？」

「し、静かにしてくださいーい！」

ネギ先生が声を張り上げるが、ざわめきが収まる様子は無い。このあとの展開は…

「はいはい注目！転入生への質問はこの報道部の朝倉和美にお任せ！」

だろうな。最初の1時間目は質問で埋まるだろう。

「つてことで良いですかネギ先生！」

「ええっ！？えつとお…（チラツ）」

ネギ先生が高畑先生に確認を取り、高畑先生が頷いた。

「そ、それじゃあ、1時間目は皆さんの質問の時間にしようと思います！」

「わぁ流石先生話がわかる！んーでもやっぱり人数多いし……じゃあとりあえず共通の質問3つで、あとは各自聴きに行くってことではない！」

「「手抜き……！！」」

「う、うるさい！色々な情報を集めるのも記者の仕事だよ！ゴホン。それじゃあまず、お名前をどうぞ！」

「マンガープリンや」

「亜差霸蚊です！」

「夢路雪乃や」

「あんぎゃーです、呼び名はどうとでも」

「清浦刹那……です」

「Kだよー」

「緋水と言います」

「え、えと、あの、蒼の空音、です……」

「はいありがとー！じゃあ次は……」

いや待て、何人が明らかにおかしいところがあったらどう！？  
何故突っ込まない！？

「うん、趣味かな？皆さんの趣味は！」

「んー、これってのは思い付かんけど……やっぱゲームか？」

「俺も同じ、時々プラモ組んだりするけど」

「歌ったりとかかね？」

「いや、聞かれても…私も何だかんだでゲームかな」

「趣味…とは違うかもしれないですが、弓道を少し……」

「自転車乗ったりするのは好きだよ？」

「カードゲームは割と好きだな、遊戯王とかDMとか色々やってる」

「あ、あの、小説、読んだり、とか……」

「ほうほう、じゃあこれでラスト！この中で気になる人はいますか！？」

…少々気になる質問だな。これで誰をあげるのか…もしもお嬢様だったら…

「んー、まあパツて見た感じ、綾瀬さんに宮崎さんってとこかな」

「俺も宮崎さん、後和泉さんかね？」

「古菲さんと龍宮さん、あと長瀬さんだな」

「エヴァと超鈴音、龍宮真名」

「む…私は特にいません」

「相変わらずだなあ…私は千雨ちゃんと近衛ちゃんかなあ」

「俺は…ふむ、桜咲さんかな？」

「え、えつと、ザジさんと、那波さん……？」

「……おおおおー！！！！」

お嬢様を含めた何人かが照れている。しかし…問題はそんな事ではない。

お嬢様の事こそ一人しか出さなかったものの、他には古に楓や真名、私といった戦闘力の高いメンバー。古は裏の事は知らないし、全員が全員裏のメンバーを出した訳でも無いが……。

しかしそれに加えてエヴァンジェリン。聞けばあんぎゃーすとやらと清浦刹那の二人は、エヴァンジェリンと一緒に住んでいるそうだ。

何の目的かはわからないが……やはり、警戒しておいた方がいいだろうな。

お嬢様は、絶対に私が守るんだっ……！

<Side杏>

なーんか桜咲刹那が睨んでるね。特にKと緋水さん辺りかな？

まあ私には関係無いけど。どうせ「お嬢様が」とか思ってるんだろうな！。

「ねえねえ甘い食べ物って好き？」

「大好きだよ。よく自分で作ったりするの、よければ食べに来ないかな？」

「ええ本当！？」

「やったね！」

三つの質問が終わったあと、クラスの人達から質問攻めを受けている。

私だけではなく、他の何人もが私達の周りに集まっていた。

質問の輪に加わっていないのは……桜咲刹那、エヴァ、ザジ・レイニーデイ、龍宮真名、長谷川千雨、超鈴音、茶々丸、長瀬楓か。わかりやすいね全く。

なんかあつちでパルとか委員長とかがうるさいけど、知らん。

「因みに和菓子派洋菓子派？」

「どちらも好きだしどちらも作るけど、よく作るのは洋菓子かなあ。和菓子はどうしても難しいんだよね、まあそれでも作るけど。あんみつとか羊羹とか好きだよ？」

…お？

「すまない、ちょっと良いか？」

「いいけど…えっと、龍宮さんだったよね」

「ああ」

なんと、話しかけてきたのは龍宮さんだった。

改めて見るとやっぱりでかいよね。でも…これ公式だと184だったよね？そんなに高くない…というか、私と同じくらいか。

そりゃそうだ、180の女子中学生とか人間じゃ無いでしょ。…ま

あ龍宮さんは半分人間じゃ無いけど。

それよりも、何聞きたいんだろう？

「餡蜜といったら？」

「駅から10分」

「甘味・櫻屋！！」

ガシツ、と私と真名と夢路の手が組み合った。  
待て夢路、何処から出てきた。

「餡蜜と聞いて。料理好きなんだよ」

「そうなのか？」

ふふ、今度私が奢ろう。君達とは気が合いそうだ」

「じゃあ私も今度餡蜜作るよ。是非龍宮さんには食べてほしいな。

その時は夢路、手伝ってよ」

「お安い御用だ、ってな」

「ふふ、呼び捨てで構わないよ。というか、ここのクラス皆同級生な訳だからな。わざわざよそよそしく苗字で呼んだりしないでいいよ」

「「「その通りー！」「」」」

……ふふっ。

「じゃあ私も杏で良いよ。よろしく、真名」

「ああ」

まあ幸先の良いスタートかな？

…あつちでマンゴーと亜差覇蚊とクラスメイト数人が騒いでいる以外は。

「とりあえず、静かにする！」

「「あだあぁっ！！」「」」

<Side薬味>

…？今何か変なこと言われたような気が…？

まあそれは良いか。

今は2時間目、僕の受け持つ英語の授業なんだけど……

何で僕が誰かを当てようとするとか皆目を逸らすんだろ？折角答えるチャンスなんだから、皆もつと前に出てくれば良いのに……

「もしもし？もしもし」

「はははいっ！？」

「そんな驚かなくてもええやん……終わっただ、これであってるか？」

「え？あ、はい、ええと……はい、合ってます。マンゴープリンさん、ありがとうございます」

「はっはっは、ええってええって。席戻るでー」

「はい。ええっと、マンガープリンさんが答えた通り、この文は不定詞の It is... to を使い…」

それにしても転校生の皆って、クラスの他の人よりも頭がいい人が多いなー。

あれ？何人か机に突っ伏しているけど……どうしたんだろう？

(キーンコーンカーンコーン……)

「あ、授業が終わりましたね。それでは今日の英語の授業はここまです。

それで、えーと(ガサゴソ)……あ、あったあつた。

今日は皆さんに宿題があります」

「「「「「ええ……っ!?」「」「」」

そ、そんな叫ばなくても…

「宿題といつても、今日やった授業の簡単なおさらいと、次の授業への繋ぎになるので、量は少ないです!ですので、皆さんなら大丈夫ですよ!」

「「「「「うえ……い」「」「」

そ、そんなに難しくない英語のプリント一枚なのに……

(キーンコーンカーンコーン……)

朝のHRでも言ったけど、5時間目は身体測定だから昼休みのうちにもう一度クラスの人達に報告しておこうかな。

「お、ネギ君としたー？」

「ハ——イ！」

「……キャーーーー！ネギ君のエッチーーーー！」

わ、わざとじゃないのに――！

「胸あるよなあ――！」

「わーっ！」

「いたたたた……取り合えずどこかで飯食ってこんとなあ」

188

そこでマンゴープリンさん達と目が合った。

「一緒に食うか？俺達教室入れないし、適当に購買部で何か買うけど」

「あ、じ、じゃあよろしくお願いします！僕お弁当持ってきますね！」

うん、転校生の人達も皆優しいし、僕これからもやって行けるかも！

ただ…転校生の人達、なんか変な目で見てたような……気のせいかな？

<Sideぬらりひょん>

…なんか失礼なと言われた気がするのう。

まあ今はどうでもいいがの。

「断る」

「…理由を聞いてもいいかの？」

「私にメリットが無いな」

「…メリットなら十分な気がするがのう」

「あのガキから血を搾取する必要が無くなったんだよ。残念ながら  
他を当たるといい」

今わしはエヴァンジェリンに、ネギ君に経験を積ませるために一芝居打ってほしいという旨を交渉しているのじゃが……

「ネギ君は彼の……」サウザンドマスター”の実の息子じゃ。その

直系の血を吸えれば、呪いのほうも解きやすくなるんじゃないかと思うがのう？」

「まあ可能性としてはあるだろうが、所詮あの馬鹿の呪いは魔力で力任せに縛ったもの。」

言ってしまえば別にあのガキの血でなくとも、他の血で魔力を補えば簡単に解けるんだよ」

「しかし、そんな魔力を何処から手に入れるつもりじゃ？」

「わざわざお前に言う必要があるのか？」

すました顔で茶々丸君が入れた紅茶を飲むエヴァンジェリン  
これは、難航しそうじゃのう……

「……だがまあ、ある程度私の望みを聞き、全て承諾するのであれば考えてやらない事も無い。」

やるかやらないかは別問題だけどな」

「……聞こう」

正直な話、エヴァンジェリンに必ず協力を仰がないといけないという訳ではない。

しかしこの大きなチャンス、ものに出来るならものにしておきたい。修学旅行も近いし、芝居だとしても実践を経験させておくのは悪いことではなからう。

「まず第一に、『登校地獄』を自分で解除することを認める」

…登校地獄自体はもう解除されても問題無いじやろう。というか流石に不憫じゃしの。

「……出来るのであれば、恐らくは問題無いじやろう。他の先生へはわしが説得する」

「だろうな。第二に、ネギ・スプリングフィールドの私への過度な接触の禁止」

「む……」

……難しい。殆ど無理だとは思っているが、ネギ君がエヴァンジェリンの弟子になるようにしたかった所じゃが……。

こんな事を言つては他の先生達にどやされるだろうが、エヴァンジェリンの指導はネギ君に合うだろう。

属性的なことではなく、性格的な意味での。しかし……

「……まあ、最初の実戦をつめるだけでも儲けものといったものじゃ。こんな機会、普通の魔法使いならまず無いからのう。

あいわかった。魔法関連の指導については他の魔法先生に頼むとしてよう。

まだあるのかの？」

「ああ、最後にだが……そろそろうつとおしくなってきた所だ。私をこの学園結界の対象から外せ」

「っ！？それは……」

学園結界。この学校を守るための巨大な結界。

その実態は、莫大な電力を使った強大な対妖・対魔の結界。侵入を阻害する訳ではなく、中での行動を阻害するものじゃ。

これがあるからこそ、外から来た召喚術師の使い魔等にも対抗できるのじゃが……

「まさか、気づいていないとでも思っていたのか？」

この学園結界が、全ての魔族等を対象とする……つまり高位の悪魔や、私のような真祖をも無差別に対象とする事を。

くくく、考えてみれば、登校地獄のみでここまで魔力が減衰するところもあるまい？」

嘲るような目でこちらを見てくるエヴァンジェリン。

……むう。しかしこれは……

「……正直な所、難しいのう。学園結界はそもそもは外からの脅威に対抗するためのものじゃし……」。

これほど大きな術式となると、一部の細かいところを修正し、何かを対象に選ばないように……というのモかなり大変な作業になるしのう……」

「誰が『出来るかどうか』を聞いたんだ？ 私は『するかしないか』を聞いたんだが？」

「……ぬうう。仕方ない、どうにかやってみるとするか……」

「それでいいんだよジジイ。では最後だ」

「まだあるのかの！？」

正直な所、ここまででもかなり厳しいところなんじゃが……

「何、簡単なことだ。私はあのガキに勝つ。あのガキは勝たせん。まあ普通にやれば私が勝つだろうが、途中でいらぬ邪魔をするな、ということだ」

「ぬ？それはどういう事じゃ？流石に理由も無いただの我が儘を通すのは……」

「ふん、そんな事もわからんか……？」

年端もいかないガキが、いくら天才とはいえ吸血鬼の真祖に勝ってしまったらどうなると思ってるんだ？」

「……自信を持ち、これからの糧になると思うがのう？」

「……はあ、駄目だなこいつ」

完全に呆れた目で見られる。

「調子に乗るに決まっているだろうが。」

普通の魔法使いでもどれだけでも調子に乗るだろうに、お前は吸血鬼の真祖を倒すということを理解しているのか？

10年以上も私がここにいるから感覚が麻痺しているのだろうが、あまりにも考えが無いな。

吸血鬼を正面から倒すというのはそういう事なんだよ、覚えておけ！」

そういつてわしを一喝するエヴァンジェリン。

ぬう、今気づかされたわい。確かに考えが甘かったのう。

エヴァンジェリンの言つとおり、感覚が麻痺していたようじゃ。しかし……

「……考えさせてもらってもいいかのう？」

「駄目だ、今決める。どうせ結論は変わらんだろうし、お前に時間を裂くつもりもない」

「……ぬう」

……5分間悩みに悩み、わしが出した結論は……

<Sideエヴァンジェリン>

「……こちらとしても、流石にその条件を全部飲むことは出来ん。妥協は……」

「出来んな。一つでも飲まないのなら貴様らに協力はしない」

「……ならせめて、こちらにもいくつか条件を追加させてくれんかのう？」

流石にこれではこちらの不利益が過ぎるからのう」

「立場が分かってるのか、と言いたい所だが……臍を曲げられても困るからな。聞くだけは聞いてやろう」

さて、ここまでは想定……というか、あいつの言った通りとなったな。

あいつがいなかったら恐らく、私はこのジジイにあのガキの経験を積ませるためのものとなつたろうしな。

全く、杏には頭を冷やされたよ。

「そういえば、エヴァ……エヴァはネギ・スプリングフィールドの血を吸う気あるの……？」

「どうした、急にそんなことを聞いて？まあ、呪いというのはその本人の一部……血だったり髪だったりだな。そういうものを触媒にすれば解きやすいものだからな。それがどうした？」

「多分だけど今エヴァにかけた呪いって、そういうのは意味無いかも……って思つて……ふあ……」

「おい待て寝るな、どういふことが答えてから寝ろ、おい！」

今は既に日課となつた杏からの吸血を済ませ、寝ようとした時に唐突に聞かれた。

その返答について問い質すと、杏の言い分はこうだった。

「だって……それをかけたのはサウザンドマスターでしょ……？ふあ……呪い自体が目茶苦茶だし……普通のやり方で解けるの……？」

「……あ」

「んん……貯めた魔力で強引に解除するとか……一力所綻びを作つてこじ開けるとか……適当には適当だよ……お休み」

そのまま寝息を立てる杏。

確かにこいつの言った事には一理ある。

あのバカは魔法の中でも一部しかまともに使えないし、何よりわざわざ呪いの為に何かを準備したり……とかそんな柄ではないだろう。

とりあえずそのことについては明日考えよう。

そうとわかれば急ぐ必要は無い。このまま杏からの吸血ですこしずつ魔力を貯めていけば事足りる話だからな。

そんなことを考えていた翌日ジジイに呼ばれ、あのガキを育てるために三文芝居をやれと提案を持ち掛けられた。

その後こちらのアドバンテージにより交渉は逆転。今に至るという訳だ。

「まず……学園結界と登校地獄を解いてもいきなり学校を出ていかず、今年一年は学校で過ごし、きちんとこの学校を卒業してほしいのじゃ。」

これは魔法使いとしてではなく、一人の教育者としての願いじゃ」「ふん、それくらいなら構わん。その後の自由に比べればマシだ」

ただ自分の意見を通すのではなく、相手の意見もある程度飲むでないと困るのはこっちだからな。

「二番目に、もしも我々でどうにもならん相手が出たときに、三度まで力を貸してほしいのじゃ」

「多いな、二度だ。それも私の意思で出るかどうかを決める」

「……ぬう、わかった。協力を要請できるというだけでも儲けもの

じゃな。

最後に、授業や校内行事等にキチンと出席すること」

「登校地獄のせいで校外行事は出られなかったからな、構わん。修学旅行の行き先は京都にしるよ？」

「元よりそのつもりじゃわい。では契約書を用意するから、少し待ってくれ……」

あつたあつた……よし、これでいいじやろつ」

ジジイが用意した契約書を隅から隅まで5回読み直す。

騙すようなことが書いていないことを確認し、魔術的、もしくは技術的隠蔽がなされていないことを確認し、念のため複写の魔法でコピーを取り、判を押す。

「そら、契約成立だ。とりあえず今日の夜にでも適当な奴から血を吸うとするかな」

「すまぬのう。血を吸う量は押さえ、魔法にあまり関連していない生徒を狙ってくれんかの？これはわしの独断じゃからの。

出来る限り人に知られたくないのじゃ」

「わかつている。ではな」

ジジイの部屋を出て家へ向かう。

さて、手加減用に杖と魔法薬を準備しておくか……

魔力も抑えねばな。

こう考えると面倒だが、まあ仕方ないか。

こつこつ時の女子のテンションは異常。もしくは舞台裏での交渉。（後書き）

アンケート結果はサイトの掲示板の方に書きに行きます。  
どうでもいいけどロリになりたい。

B Y杏

てなわけで次回は緋水さん  
いつてみよ〜！

期間は10月11日だ〜

B Y亜差霸蚊

この星がデュエルフィールドだ。（前書き）

ども、緋水です。今回は俺なりに魔法？に覚醒する様子を書いたの  
でほとんどっていうか全然皆さん出てきません。

後自分でこんなのは緋水じゃ無いと思いました。何も言わないで  
下さい。それじゃどうぞ。

この星がデュエルフィールドだ。

side 緋水

「ふーむ、やはりお前には魔力があるのに魔法が使えないようだな。」

「そうですか……。な、ならチャチャゼロさんみたいなドール契約は「私でも苦勞して出来たんだぞ？魔法を使えんお前が出来るのか？」ですよー。」

ハア、やっぱり出来ないのか……。今俺は学校が終わったのでエヴァさんの別荘で魔法について何の適正があるか軽く調べてもらったんだけど……。

「まさか魔法が使えないっていう難関があるとはなあ……。」

そう、何と俺には魔法適正が皆無らしい。まあある意味貴重何だろうけど。

「今の貴様は正しく魔力タンクという言葉が似合っな。」

「こつという意味での貴重はいらないんですがねえ……。」

「まあ杏から代償は貰ってるしな。面倒は見てやる。」

ああ……。この気遣いが有り難いなあ。今度杏さんには礼を言っておこう。

「ありがとうございます。まあ今日は帰ります。」

「ん？わかった。また明日会おう。」

そうして出口から出ていく時にマンゴープリンが戦っていた時の事を思い出した。何っーか、

「うらやましいよなあ……。」

そうして自分の部屋に戻ろうと夜道の中、足を進めると、

ドガンー！！！！

「なんぞ！？」

いきなり森の方から爆発音が聞こえた。そうか……。今は夜だから  
関西の連中何かが攻めて来ているのか……。

「魔法は無理だが……。見ることなら出来るよな?」

ある意味これが俺にとっての本当の意味での日常から非日常の始まりだったのかも知れない。

side 鬼

今宵は月が映えるのう……。まったく、喚ばれてなかったら酒盛りをしたくらいやわ。にしても、今回の相手は偉い弱かったから物足りんのう。

「ぐううう……。」

何や、まだ生きとったんかい。なら楽にしたるわ。そう思い棍棒を  
振り上げた瞬間、

ガサッ、

「誰や!?!?!」

「のわ!?!」

音がするほうに棍棒を振り回すと風を切る音と誰かがコケる音がした。

side 緋水

ただ見るだけだと思い近づいてみると瀕死の男の人に鬼がいた。

「ヤバいんじゃないか……?」

最初は気楽だった。原作をチラリと見た時には普通に鬼何かを倒していたからだ。

だが現実とは違った。そりゃそうだよな。あんな無双出来るのは一握りだもんな。そしてどうしようと考えた瞬間枯葉をふんでしまった。

「誰や!?!」

「のわ!?!」

何か嫌な予感がしたため咄嗟に避けようとしたが転んでしまった。だがその瞬間頭上を棍棒が越えて言った。危なかった……。そう考

えた瞬間

「コレを見られた以上兄ちゃんには死んでもらうしかないなあ？」

「アハハ、見逃して貰えませんか？」

「無、理、や。」

「失礼しました！！！！」

脇目も降らずにダッシュをした。後ろから「待てやあ！！！！」とか聞こえるけどガンスルーだ！！！！

そして30分ぐらい走りどうにかして撒いたと思い一息ついた。

「ハア、ハア、どうする？スグにここだっで見つけられちまう。とりあえずマンゴーに連絡して救援寄越して貰うか。」

絶対にキレられると思いつつケータイに手をかけてマンゴープリンの電話番号に電話をかけた。

「ん？何や、緋水こんな時間に。」

「たすてけ。」

「ハア？ちよいと説明よろ「パリン！」

「なっ！？」

ピンポイントでケータイが弓矢で撃ち抜かれた。馬鹿な……。あいつの武器は棍棒の筈「見つけたでえ？」

「ん？」

ひーふーみ、あるえ何かいっぱいいるんだけど。

「何不思議な顔しとるんや。仲間を呼んだだけや。」

ああ……。成る程ってヤバイ、正に八方塞がり。背中に嫌な汗が流れてくる。

「（ああ……。俺死ぬのか？）」

頭の中にはあの男は無事かとかマンゴープリンとか亜差霸蚊とかには何て言われるかなあ？とか浮かんでくる。心の何処かで慢心があったんだろうな。

「ハハ、バカだなあ、俺」

「これでサヨナラや」

目の前に棍棒が迫ってくる。頭の中には更にあのデッキまだつかって無いとかあの新弾買って無いやとか更に思い浮かんできた。その瞬間、急に死ねないと思い。

「死んでたまるかああ！！！！」

「んな！？」

イナバウアー状態で棍棒を避けた。しかし無理矢理回避をしたせいで腰を痛めた。

「何や、しぶといのう。」

「何分諦めは悪い方でね？それにまだ死ねないんでね。」

しかしどうする。実際たっているだけでも辛い。その瞬間、別荘で  
のエヴァさん会話した時の事が思い出された  
回想中

「お前は専用の媒介が必要かもな。」

「専用の媒介、ですか？」

この時まずは杖をつかってみるとエヴァさんに言われて杖を受け取  
って魔法を唱えて見たら、

「プラクテ・ビギ・ナル【火よ灯れ（アールデスカット）】」

何も起らない。まあ初心者が一発で出来るわけないよな。

二十時間後……。

「orz」

何回やってもいかなかった。何故だ？

「ふむ……。これは……。」

「わかったんですか!？」

「いや、確証は無いのだが……。お前には杖から拒否されているよ  
うだな。」

「なん……だと……?」

何ですかそれ?聞いた所に寄るとが俺が魔法を使おうとすると杖が  
全力で拒否するらしい。ついでに精霊もらしい。苛めですか?こ  
んな人間苛めて楽しいのか!て言うか杖と精霊に拒否されるって……。  
それで冒頭に戻るわけだ。

「まあ専用の媒介は何かがわからんからな。おそらくそれがあれば  
何とかなるだろう。」

「そう……。ですか……。」

「とりあえずお前の得意属性を調べて見るか。」

「あ……。ハイ。」

回想終了

そう、あの時専用の媒介が必要と言った……。そうすると手は勝手に自分のデッキを手にとった

「まったく、最高の相棒がいるのを忘れていた何てな……。デュエリスト失格だな。」

そう、

「俺の媒介何て決まってるに決まってるじゃないか。アハハハハ。」

「気でも狂ったんか？」

「ああ……。すまない。忘れていたよ。」

そしてデッキが光る

「そうだゲームをしないか？」

「げえーむ？何や、それ。」

気持ちが高ぶってくる。

「遊技って意味。単純さ、俺が勝ったらお前達には俺の式になって貰うから。」

「ほう……。良いやる。」

「言質はとったぜ？さあ……？」

デュエルスタート  
「決闘開始！！！」

鬼や天狗達が迫ってくる。早い。だが、俺にとってはあんなに早かった奴等が遅く見えた。

「俺は手札から「古のルール」発動！これにより俺は「青眼の白竜」  
ブルーアイズ・ホワイトドラゴン  
を特殊召喚する！」

召喚するのは初代遊戯王のライバルである社長の切り札。そして突貫してきた連中は止まる。

「んな！？龍！？召喚術師やったんか！？だが、数で呑み込んでしまい！！！」

「甘い、遥かに甘い！魔法カード「滅びの爆裂疾風弾」  
バーストストリーム  
発動！これによりブルーアイズは相手フィールドに存在する全てのモンスターを破壊する！」

「【滅びの爆裂疾風弾<sup>バーストストリーム</sup>】！」

「うぎゃ〜〜〜〜！！！」

ブルーアイズの攻撃が敵の全てに降り注ぐ。攻撃が止み終わるとまわりには妖怪の死屍累々の姿になっていた。

「な、なんちゅー強さや……。」

「さあ、俺の勝ちだ。」

そう言って近づいて行く。

「良くやったな兄ちゃん。けどあの約束は無理や、うちらは契約によって呼び出されとるんやそれを何とかせんと。」

「気合いで何とかしてみせるさ。」

そう言って俺は何も書いてないカードを取り出した。そうすると妖怪達は吸い込まれて言った。

「な、何や、何やねこれ……!?」

そうして妖怪は消え去った。カードを見て見ると「俺式百鬼夜行」  
ってカードになっていた。

「まあこれで俺も立派な魔法使い……。いや、決闘者だな。」

「ありがとうブルーアイズ。」

そういうとブルーアイズは一回吠えた後消えていった。

さて、マンゴーとかには何て説明しようか……。などと考えながら  
その場を後にした。

ついでにテンションが上がっていた為忘れていたが腰を痛めたのと  
マンゴープリン達から怒られて次の日はグロッキー状態で登校した。

この星がデュエルフィールドだ。（後書き）

何であんなっちゃったんだろう……。とりあえず恥ずかしいんで何も語りません。

by 緋水

次はKさんよろしく

10月25日が切りだよ

変態つてゆーな！（前書き）

ギリギリアウトですかね、時間的には。

25日の23:30くらいに完成しました。まあ文章量が足りないのですが。

頼む、漫画を読ませてくれ……

あ、タイトルはあまり関係ないかもしれません。

変態ってゆーな！

<Sideエヴァ>

「何、魔法の勉強に仮契約だと？」

「うん、出来れば杏も一緒に。ああ確認は取ってあるよ？」

部屋でくつろいでいたら、遊びに来ていたKが話し掛けてきた。なんでも魔法を教えて欲しいというのと、仮契約がこういうものなのかというものを聞きに來たらしい。

因みに杏と清浦は茶々丸と一緒に夕飯の買い出しだ。

「今まで貴様は一般人だっただろうに、何故魔法を？」

「うーん……自衛？ほら、今の私達って正しく魔力タンクだし。

…まあ、何人かエヴァに魔法を師事してもらってるっばいけど」

なるほど、こいつの言わんとしていることはわかった。

つまりもしも自分達の持つ強大な魔力を狙って何かしらに襲われた時に、何も抵抗する手段が無いのは心許ないということだろう。

「まあ、協力してやらん事も無いが……対価はあるか？何も無しにこれ以上面倒は見れんぞ？」

「私の血と魔力を、講義一回ごとにある程度渡すよ。それじゃ駄目かな？」

「……もう一押しだな、どうだ？」

「貸し三つ分」

「乗った。いいだろう、色々と教えてやる」

貸し三つとはまた大きく出たものだ。それほどまでに魔法を使いたいのか？

まあ私は損しない訳だから、なんでも良いんだが。

「ではとりあえず、今日は別荘使って基礎の基礎だけ教えろとするか。」

杏には夜に私から教えよう」

「お願いねー」

別荘内、とりあえず広場で向かい合う。

「まず言っておくが魔法を使うにあたって、魔力を感じ取れなければ何も始まらない。」

魔力を感じるには人それぞれだが……まあ手っ取り早い方法でいいか、とりあえず座って目を閉じる」

「はいはい」

「目を閉じたな？ではそのままじっとしている」

Kの手を取って少量の魔力を流し込み、体内で循環させる。

他人の魔力を体内に入れるから少々不快感があるかもしれないが、まあそこら辺は我慢してもらおうでしょう。

「出来るかぎり集中しろ。」

人によってまちまちだが、まあ大体の奴は臍の上辺りに何かあるのを感じるだろう」

「……あ、これかな……？」

うう、気持ち悪……」

「人の魔力を流し込まれてるんだからそうだろうよ。」

魔力を感じ取れたなら、それを全身に回す……といってもわからんだ

ろくな。

とりあえず私がお前の中で循環させるから、まずはそれで感覚だけでも覚えるといい」

「うぐ……頑張ってみる……」

顔をしかめて集中を始めるK。

まあ飲み込みは早いようだし、コツを掴むのも早いだろうな。全く、こいつらはどこまで規格外なんだか……。

<Side K>

別荘の中で約2日。

つまり現実世界での約2時間を魔力運用の練習にあて、ひいひい言いながらどうにかこうにか魔力を掌握できた。

「お前の属性は闇だな。闇単とはまた珍しい」

「え、そうなの？別荘の中で魔法の講義してもらってる時に聞いたけど、単属性の人自体は結構いるって聞いたけど？」

「まあ単属性自体はな。だが単闇属性となるとそうはいかない。そもそも人間自体闇属性の適正が出るのは珍しいのだ。

光単ならそこそこ見るが、闇単となると……」。

まあ私は氷複合だが闇属性だからな。一応教えてやれん事もないが……」

ツンデレですね、わかります。

んーでも……

「とりあえずは手探りで頑張ってみるよ、ありがとうエヴァ。それと、エヴァの別荘内の本読んでたら試したいこと出来ちゃって

ね……」

「試したいこと？」

「うん。思ったんだけどね、中上級の魔法覚えるより魔法の矢を極めて使った方が効率良いんじゃないかなって」

「ほう？」

面白そうに目を細めたエヴァ。

その目は続きを話せと訴えているようにも見える。

「例えばだけど、闇の吹雪や雷の暴風っていうのは広域攻撃の呪文でしょ？」

魔法の矢を数十から数百発、それも広範囲に向けて放てば同じようなことが出来るだろうし、そもそも個人対個人の戦いなら広範囲攻撃つよりも相手を狙って常に攻撃を打ち続けて相手に攻撃をさせない方が効率が良いと思うんだ」

「だが威力の問題はどうする？」

魔法の矢というのはそもそも牽制や大きな技に繋げるための攪乱のようなものだ、それ単体なら防ぐなり避けるなりするのは簡単だぞ？」

「そこら辺はなんとかかなりそうな目処はついてるんだよね。

まあ出来たら見せるよ、今はまだ練習の段階だし」

「そうか、まあ楽しみにしておいてやる。

ではそろそろ出るか。外では丁度2時間になるからな」

「はいはい。ありがとうエヴァ」

「……さてと、杏には私から話をつけておいてやる。

お前は人に見つからない程度に練習をしてろ。

お前の言う「魔法の矢」……楽しみにしてるぞ？」

「勿論！エヴァから貸してもらった本もあるしね。頑張らせてもらうよ」

私が抱えているのはエヴァの別荘に置いてあった本。何かの参考になれば良いかなと思って、エヴァに言っただけで借りてきたのだ。

「くく、その程度ならば構わん。少し興味も出てきた事だしな。では一週間後に見せてもらおう。期待しているぞ？」

「うん。今日……っていうと何か変な感じだけど、ありがとうね」

エヴァと別れて寮の部屋へと向かう。とりあえず、今日は眠れないかもなー。

<Sideエヴァ>

Kと別れて一度家に戻り、準備を整える。

今日は誰か適当な女子生徒を襲い、あの子供先生に見つかった後に一当てした後戦闘。

適当に戦った後に茶々丸を呼んで子供先生を追い詰め、適当に血を吸って撤退と。

言っただけで何だがまた随分と適当だな。実際その通りなのだから仕方ないのだが。

魔力は全盛期とまでは口が裂けても言えないが、かなりの量が戻ってきている。

正直あのガキなら負けるはずも無いが、魔力は抑えて戦わねばならん。

というか自身の魔力は使わずに魔法薬を媒介にして魔法を使い、魔力の温存と爺への嫌がらせ（魔法薬代は爺持ち）、それに加えて詳

しい力量把握を兼ねている。

まあ、あとは現場でどうにかなるか。

「待てーっ！」

現在、麻帆良の住宅地周辺でガキと追いかけてっ中だ。

流れとしては、

夜の道を一人でふらつく宮崎のどこを発見、わざと何をやっているかわかるように適当に血を吸う。

←

ガキが登場したので宮崎のどこを放り出して逃走。予想通り一人で追って来る。

←

迎撃戦↑今ここ

といった感じか。

私は普通に空を飛びながら、散発的に撃ち出される魔法を迎撃している。

ガキは箒で飛びながら、三丁十七本の魔法の矢を撃っていた。

まあ正直ポテンシャルは高い方だろう。10歳で行える魔法の威力ではないな。

だが、それだけだ。まだ自分の魔力を制御仕切れていないし、粗削りがすぎるといふもの。

磨きあげれば父を超える可能性もあるだろうが……まあ、それは私の預かり知らぬ所だな。

さて、そろそろか。

「風花・武装解除！」

ふむ、丁度良いか。  
喰らったフリをして地上に降りよう。

「ふむ、なかなかやるじゃ無いか、先生？」

「エ、エヴァンジェリンさん！どうしてあんな事をするのかはわかりませんが、もう逃げられませんかよ！これで僕の勝ちですね！

約束通り教えてもらいますよ、なんでこんなことしたのか。それに

…お父さんの事も」

「お前の親父……すなわち、サウザンドマスターのことか。ふふふ……」

「っ……と、とにかく！魔力もなくマントも触媒も無いあなたに勝ち目は無いですよ！素直に……」

「これで勝ったつもりか？さあ、お前の得意な呪文を唱えてみるがいい」

後ろに茶々丸が着地する音。

「（っ！新手！？なら二人まとめて……）ラ・スキル・マ・スキル・マギステル……」

棒立ちで詠唱を始めたガキに向かって茶々丸が走り、デコピンを食らわせて詠唱を中断させる。

その後も何回か詠唱をしようとするガキだが、その度にデコピンされる。少しは学習しろよ。

「い、一体何なんですかー！  
って、あれ！？き、きみはうちのクラスの……」

「紹介しよう。私のパートナー、3-A出席番号10番「魔法使い  
ミニステル・マギ  
の従者」絡操茶々丸だ」

「え、なっ……ええ……！？茶々丸さんがあなたのパートナー！？」  
「そうだ、驚いたか？元々「魔法使いの従者」とは戦いのための道

具だ。

我々魔法使いは呪文詠唱中完全に無防備となり、攻撃を受ければ呪文は完成できない。

そこを盾となり剣となつて守護するのが従者の本来の使命だ。

つまり：パートナーのいないお前は我々二人には勝てないということさ」

嘘だけだな。一人である程度戦えない魔法使いなんぞ、「一流」からしてみればカモみたいなものだ。

「茶々丸」

「申し訳ありませんネギ先生」

茶々丸がガキを捕まえる。

さて、あとは適当にナギへの悪口を言つて、適当に血を吸つて終了だな。

まあこの程度なら安い仕事だ。

<Side 三人称>

それは突然の乱入だった。

「この変質者どもーっ！」

「……ん？」

「ウチの居候に何すんのよーっ！」

神楽坂明日菜が繰り出した飛び蹴り。

普通なら避けられない速度とタイミングであるために、反応が遅れたエヴァンジェリン。

そのまま行けば、エヴァンジェリンは思いっきり蹴り飛ばされるは

ずだった。

「っ！？」

「えっ！？何！？うわきゃあ！？」

突如二人の間に割り込んだ人影。

神楽坂明日菜の蹴りを受け止め、そのままネギの元へ投げ飛ばした。

「あ……？」

その姿は明日菜やネギはもちろん、エヴァにも見覚えがなかった。ジーンズに白いＴシャツという簡素過ぎる服を着た女性。出るべきところは出て引つ込む所は引つ込んだ体型の持ち主は、何故か顔を黒いフルフェイスヘルメットで隠していた。

(……いや、もしかしてコイツ……)

「エヴァンジェリンさん、大丈夫ですか？」

「……その声、やはりそうか。まあいい、助かった。一旦戻るとするか」

「あつ、ま、待ってくださいエヴァンジェリンさん！」

「待てと言われて誰が待つか！」

エヴァンジェリンの後ろにさらにもう一人現れる。こちらは学園指定の制服だった。

ただ、顔に狐のお面を着けていたが。

その二人を伴って、エヴァンジェリンは闇の中へと消えていった。

「う、うわーん！」

「ちょ、ちよつとネギ！？」

あとには、全く敵わずに泣き出すネギとそれをあやす明日菜しか残らなかった。

「ふん、杏に清浦。これは一体何なんだ？」

「ん？エヴァが傷つくところが見たくないだけだよ、私は」

「お姉様が行って一人で留守番なんて絶対に嫌です」

エヴァンジェリンの家にて。

椅子に座って話しているのはエヴァンジェリンと杏、そして清浦刹那。

あの場にエヴァンジェリンを助けにきたのはこの二人であった。

「ふん、まあいいが……今度からはそういうのを無断とするなよ？まだ戦う力を持っている訳ではないんだからな。まあそこらへんは追い追い教えていくがな。」

もう夜も遅い。さつさと寝るとするか。杏、着替えたら私の部屋に来いよ」

「はいはい」

「お休みなさい、エヴァンジェリンさん、お姉様」

変態ってゆーな！（後書き）

うわあいこれは酷い特に後半orz

もうね、適当感が見え見えていうね。

まあ急ピッチで書き上げたから仕方ないけど。

B  
y  
K

私のミスではるのが遅く……申し訳ないm（——）m

さてさて次は清浦さん11月8日でお願いしま〜す（<——>）

B  
y  
亜差霸蚊

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2739u/>

---

何か変な奴らが変な事しよったで（笑）

2011年10月26日12時59分発行